

戦国期多摩の土豪・有山源右衛門と有山屋敷の検討

橋 場 万 里 子

はじめに

戦国期小田原北条氏支配下の武蔵国多摩郡関戸郷（現・東京都多摩市および周辺域）の土豪・有山源右衛門に関して、北条氏より出された古文書五通（現存二通、写三通）が残されている。これらの古文書には、有山源右衛門が関戸宿の商人問屋の権利を認められる一方で伝馬負担を担っていた様子や、関戸郷内の新田開発や関銭徴収をおこなっていたこと、そして関戸郷における百姓自治、六斎市の開催、などについて記されており、当時の土豪の一側面を知ることができる。⁽¹⁾

その一方で有山氏に関しては未解明の部分も多く残る。文化七年（一八一〇）～一一年（一八一四）に作成され、天保元年（一八三〇）に江戸幕府に献上された地誌『新編武蔵風土記稿』によれば、有山家は、源右衛門の子・新右衛門の代に断絶したとあり、詳細を知ることが難しい。

しかし、多摩市域には、この有山源右衛門の屋敷跡と伝えられる場所が残されている。この伝承地は、近世初頭以降「有山村」「有山」「有山屋敷」などと呼ばれ、「有山」という集落名は、現在に至っても用いられている。また、有山周辺には水路が張り巡らされ、時期は不明ながらも灌漑開発の存在も指摘されている。⁽²⁾さらに、平成一五年（二〇〇三）には、隣接する曹洞宗寺院・観蔵院の日光菩薩像から像内文書が見つかり、開基が有山氏であることが確認された。⁽³⁾

こうしたことから、有山氏については、すでに知られた五通の古文書だけではなく、現地に残された近世史料や伝承地などから、その性格をより詳しく知ることができるのではないかと考えられる。そこで、本稿では、有山氏にかかわる史料や絵図・航空写真などを確認・整理し、有山地区と、有山源右衛門について検討してみることにはしたい。

第一章 古文書から見た有山源右衛門の動向

第一節 有山文書について

有山源右衛門に関する古文書類のうち、小田原北条氏支配期に出されたものは以下の五通である。

- ①「松田盛秀判物」 天文二四年（一五五五）一月 多摩市教育委員会所蔵（旧杉田勇家所蔵）多摩市指定有形文化財
- ②「北条氏印判状写」 永祿七年（一五六四）九月 国立公文書館所蔵「武州文書」
- ③「松田憲秀印判状」 天正一三年（一五八五）三月 多摩市教育委員会所蔵（旧杉田勇家所蔵）多摩市指定有形文化財
- ④「松田憲秀印判状写」 天正一四年（一五八六）三月 国立公文書館所蔵「武州文書」
- ⑤「松田憲秀判物写」 天正一六年（一五八八）九月 国立公文書館所蔵「武州文書」

このうち現存するのは①③の二通で、残りの②④⑤の三通は、写しが大田南畝による『調布日記』（文化六年成立）や『玉川披砂』、先に挙げた『新編武蔵風土記稿』、およびその編纂のために古文書の影写を集めた『武州文書』、明治時代の皇国地誌である「南多摩郡関戸村誌」^④などに記録されている。『調布日記』や『新編武蔵風土記稿』には五通ひとまとまりで記録されていることから、①～⑤までの文書は文化文政期にはひとつの文書群であったと考えられる。そのためこれら五通の文書はまとめて「有山文書」と称されることもある^⑤。

五通の文書の内容を簡単に見ておきたい。⁽⁶⁾

【史料①】松田盛秀判物

天文二四年（一五五五）一月二日

猶以商人道者

問屋之事、不可有

関戸宿中商人

別条候、有違乱之者ハ

とゐ屋之事、從

此方へ急度可申上候、

今日申付候、若至

自余へ付者、可及

其斷、於此上伝馬

以下、弥無々沙汰様可

申付者也、仍如件

天文廿四乙卯

正月十一日 盛秀（花押）

有山源右衛門尉殿

【史料②】 北條氏印判状写 永禄七年（一五六四）九月二〇日

関戸郷自前々市之日定之事

一ヶ月 三日 九日 十三日 十九日 廿三日

廿九日

一、伝馬之事、一日二三疋定畢、御出馬之

砌者、十疋可立之、但自当年來年中

如此、自寅年如前々可致之事、

一、濁酒役并塩あい物役、御赦免之事、

已上

右、定所如件、

（朱印影 禄寿応穩）

（永禄七年）
甲子

九月廿日

岩本 承之

【史料③】 松田憲秀印判状 天正一三年（一五八五）三月二十四日

関戸郷中河原之

内正戒塚二、有山源右衛門

新宿立候、近辺之

荒原可成田地之由
申出候、七年荒野ニ
定出置者也、仍
如件、

乙酉

三月廿四日 岡谷

有山源右衛門とのへ

【史料④】

松田憲秀印判状写

天正二四（一五八六）年三月二日

六貫文

深谷図書助給田

三貫文

同半七郎 給田

貳貫文

齐木神二郎給田

三百文

相澤屋敷ニ出、就付送ニ、

三百文

小林神衛門 同理

以上九拾八貫五百四十八文

残而、

四百五拾貳貫八拾六文 定納

此外

五貫文

関銭有山源衛門ニ申付、

右、戌三月十一日森岡近年非分在之歟、百姓書付ニ驚、
令欠落郷間、即成敗候、然を郷中所務辻、明白ニ書立、
百姓六人ニ郷中をあつけ候、当年戌之歳納所無

未進、速ニ就致之二者、代官之停止、後年迄六人之者ニ

可預置候、少成共、横合非分不可有之候、年具渡方之義

迄ハ請取次第、給方之事者、印判可在之、若有横合者、

則時ニ書付を可上候、将又諸色到于不沙汰者、六人之者迄

可処越度ニ候、定置状如件、

戊三月十二日
(朱印影 印文不詳)

御宿越前守

有山源衛門

小磯三郎衛門

長尾内膳正

増田市衛門

鈴木八郎左衛門

岡谷将監

塩沢弥左衛門

婦白

【史料⑤】

松田憲秀判物写

天正一六年（一五八八）九月三日

其地関之儀、如前々

可置之候、少も私曲

之筋目自横合

聞届に付而者、可為

曲事者也、仍如件、

子九月廿三日 憲秀（書判）

有山源衛門どの

史料①は、小田原北条氏の家臣・松田盛秀より有山源右衛門尉に宛てて出された判物で、関戸宿の商人問屋を有山源右衛門尉にこの日より申付けたものである。問屋の権利を与える代わりに、伝馬の義務を課している。この文書は、問屋の権利と伝馬の義務が一体となっていたことを示すことでも着目されたが、有山源右衛門尉の名が見られる初見史料でもある。また、「関戸宿」の存在を確認出来る一次史料としても重要である。

史料②は、関戸郷にて三と九のつく日に六斎市を開くことを決めたものである。六斎市の開催の他、伝馬で供出する馬の頭数を平時三匹、戦闘時一〇匹と定めている。また、濁酒役・塩あい物役の免除も認めている。この史料により、関戸には市が立てられたことが判明する。

史料③は、有山源右衛門が関戸郷中河原の正戒塚という場所に新宿を立てるにあたり、七年間の免税措置を認められたものである。源右衛門が新宿を立てた正戒塚（性戒塚・性皆塚）は、『新編武蔵風土記稿』によれば中河原村の東にあつたが、いつの頃か多摩川洪水の時に流出し、川原になったという。

史料④は、又代官の森岡に代わり有山源衛門・小磯三郎衛門・増田市衛門・鈴木八郎左衛門・塩沢弥左衛門・埴白ら現

地の有力百姓六人に郷中を預け、所務を任せたものである。現地有力者に所務を預けたことが注目される。また、ここに示された六人の百姓が、当時の関戸郷の有力者であったことも分かる。小磯氏は乞田村、増田氏は乞田村または関戸村、塩澤氏は寺方村のうち原関戸地区に見られる姓であり、関戸郷の範囲に乞田村や寺方村が含まれていることを窺わせる。

また、本史料は前欠ではあるものの、関戸郷の給人である深谷図書助・半七郎、斉木神二郎などへの九八貫五四八文を含む、計五五〇貫六三四文を納めるとともに、有山源衛門による五貫文の関銭徴収を認めている。関戸郷に関所があったということは地名や伝承から知られているが、本史料は関戸郷で現実に関銭の徴収がおこなわれていたことを示す上でも重要である。また、相沢屋敷、小林神衛門といった運送に携わる人物への資金配分も見られ、当時の関戸郷にかかわっていた人々について多くの手がかりを与える史料といえる。

史料⑤は有山源衛門に従来のとおり関所の設置を再確認したものである。

以上より、有山源右衛門尉・源右衛門自身については、関戸宿の間屋を担い、伝馬の義務を負い、関戸郷内に新宿をつくり、関銭徴収をおこなっていた人物であるといえる。また、郷内の所務を命ぜられた六名の百姓の筆頭にあげられていることから、当時、有山源右衛門が関戸郷の第一の有力者であったと見られている。

一方、関戸という地域についても、これらの古文書によって、当時関戸に「関戸郷」「関戸宿」「商人間屋」「六斎市」「関」があり、実際に関銭の徴収がされていたことや、関戸郷が寺方村から乞田村にかけても広がっていたことなどが分かる。

なお、史料①は年代がほかの史料より若干古い上、史料③④⑤の宛所の「有山源右衛門」「有山源衛門」に対し、「有山源右衛門尉」として「尉」がついている。このため、史料①の有山源右衛門尉と史料③以降の有山源右衛門は別人として捉える見方や、登場年代の検討から複数名存在するという見方がある⁽⁸⁾。

第二節 その後の有山源右衛門

有山源右衛門の名が見えるのは、有山文書だけではない。小田原北条氏の支配が終わった後にも、以下の史料⑥⑦⑧に有山源右衛門の名は見えている。個々に内容を検討しながら見ていきたい。

【史料⑥】「(武) 州多西郡関戸郷御縄打水帳」⁽⁹⁾ 文禄三年(一五九四)

文禄三年(一五九四)の一〇月一日から一八日にかけて実施された関戸郷の検地帳の写しである。一八日の表紙に「九冊内」とあるので、もとは九冊あったと見られるが、現存しているのはこの一日に実施された一冊と、一八日に実施された一冊の表紙のみである。一日実施分の表紙には「案内者 有山源右衛門」と書かれており、一冊すべてが有山氏が分付主である土地に関する検地帳となっている。本史料の内容はすでに神立孝一氏により、表にまとめられているが、⁽¹⁰⁾「大くりはた」「大くり」「大栗」「川はた」「川ふち」「ゑこた」「いしなた」などの地名と、そこに存在する田畑が記され、有山氏は、これら合計一四町九反余りの田畑を少なくとも所持している。

「大くりはた」「大くり」「大栗」「川はた」「川ふち」は大栗川周辺の地名と思われるが、明確な場所は分らない。⁽¹¹⁾「こた」は聖蹟桜ヶ丘駅北西の多摩市関戸一丁目、「いしなた」は聖蹟桜ヶ丘駅南にあたる多摩市関戸四丁目付近にあたる(地図1参照)。⁽¹²⁾

なお、同時期に検地が実施された近隣地域の検地帳として、文禄三年「武州多西郡一宮御縄打水帳(写)」⁽¹³⁾および「関戸之内上和田村御縄打水帳(写)」⁽¹⁴⁾がある。「(武) 州多西郡関戸郷御縄打水帳」とともに三者の検地実施日と地名を整理すると表1のようになる。関戸郷の検地帳には抜けがあるが少なくとも一〇月一日と一八日に実施され、一宮(一ノ宮村)の検地は同一三日と一四日に実施された。上和田村は、一日から一五日まで毎日検地が実施されている。以下、一ノ宮村と上和田村の検地帳を見てみる。

(a) 「武州多西郡一宮御縄打水帳」(写) 文禄三年(一五九四)

文禄三年一〇月一日・二日に実施された一ノ宮村の検地帳の全五冊の写しである。

地名は、「前田」「萩原」「向田」「まへた」「前」「小峰(こみ弥)」「まいた」「桑原」「かふ木」「後田」「いり寺」「河原」「まとの上」「くぼ田」「たかきし」「北田」「□田」「ねき田」「池田」「柵き橋」「鳥居戸」「宮下」「杉かさき」「三反田」「舟田」「根田」「四反田」「ミ之まへ」「屋敷まへ」「森の根」「大畑け」「外向」などが並ぶ。これらの一部は場所が比定でき、一ノ宮の「舟田」は関戸郷の「多こた」と隣接している(地図1参照)。

一ノ宮村の分付主には有山源右衛門の名はなく、「向田」の中畑九畝二四歩、「北田」の下田一畝二二歩、「舟田」の下田三反三畝一八歩の作人として「源右衛門」が見えるのみである。このことからすれば、有山源右衛門の所有地は「多こた」を境とする関戸郷に留まり、一ノ宮村には及んでいなかったといえるだろう。

(b) 「関戸之内上和田村御縄打水帳」(写) 文禄三年(一五九四)

文禄三年一〇月一日から一五日に実施された上和田村の検地帳全五冊の写しである。

「柵もも」「山内」「下河内」「塚原」「竹の下」「大栗字竹の下」「大栗」「御いち」「まげし(まげしカ)」「新道」「倉沢」「堂下」「下原」「下原後」「下原前」「川根」「前河内」「中尾」「池田」「梨子木田」「ぶたい」「とぼり」「屋敷前」「かいと田」などの地名が記される。

現地比定が出来る地名を追っていくと、「柵もも」は、寿徳寺付近の地区である。また、「塚原」は大栗川そばであり、「新道(新堂カ)」⁽¹⁵⁾「倉沢」は日野市百草となる。当初寿徳寺付近から始め、その後、宝蔵橋の西側から大栗川を南にさかのぼり、和田の新義真言宗寺院・高蔵院付近までを検地したものと考えられる(地図1参照)。

現地案内人は、「源右衛門・十左衛門」であるが、「源右衛門」の肩に「柚木」の注記があるので、有山源右衛門ではなく、柚木源右衛門であることがわかる。本検地帳には分付主として「源右衛門」の名が見られ、屋敷地も含めて二町六反

余りを領有している。しかし、この源右衛門は、現地案内人を務めた柚木源右衛門のことと思われ、有山源右衛門の所有地は見られない。

以上、近隣の一ノ宮村と上和田村の検地帳を確認した。有山源右衛門が案内人となった史料⑥「(武) 州多西郡関戸郷御縄打帳」は全冊が揃っており、大部分が不明ではあるが、一ノ宮村と上和田村の同時期の検地帳を確認すると、有山氏の所有地は少なくとも一ノ宮村と上和田村には及んでいないことがわかる。⁽¹⁶⁾

関戸郷の検地帳で失われた部分はどの場所のものだったのだろう。現段階での手がかりは、史料④に登場する人々である。

史料④に登場する六人の百姓の苗字からは、有山区域(有山源右衛門)、寺方村(塩澤氏)、乞田村・関戸村(小磯氏・増田氏・鈴木氏)が想定される。一方、一ノ宮村の現地案内人をつとめた大田氏や井上氏、上和田村の現地案内人をつとめた柚木氏といった姓は、史料④に登場していない。よって史料④の「関戸」、および文禄三年検地帳の「関戸郷」に一ノ宮村・上和田村は含まれていないと思われる。⁽¹⁷⁾

史料⑥に記された範囲は、一ノ宮村・上和田村は含まず、含まれる可能性があるのは、史料③に登場した中河原村を含む大栗川以北の区域および、史料④の人々の本拠となる関戸村・乞田村・寺方村付近であったと考えられる。⁽¹⁸⁾

【史料⑦】「覚書」⁽¹⁹⁾ 元和三年(一六一七) 四月

検地帳のほかに、近世以降の有山源右衛門の動向を知ることができる史料が二点ある。ひとつは、元和三年(一六一七) 四月に出された「覚書」である。

覚書

元和三年丁巳春三月

東照宮様御靈柩駿州從久能山

野州日光江山被為入御候節^遊

当往還通被為遊渡御候

供奉御役人中

本多上野介正純殿

土井大炊頭利勝殿

松平右衛門大夫正久殿

板倉内膳正重昌殿

秋元但馬守泰朝殿

成瀬隼人正正成殿

安藤帶刀直次殿

中山備前守信吉殿

榊原大内記照久殿

以下略

三月十五日
御靈柩

御泊

善徳寺

御霊柩		御霊柩		御霊柩		御霊柩		御霊柩		御霊柩	
二十五日		二十三日		二十一日		二十一日		廿日		十八日	
御泊		御泊		御泊		昼御休		御泊		御泊	
御留一日		御留一日		御留一日				御留一日		御留一日	
忍城		仙波		府中		木曾		中原		小田原	
										三嶋	

二十八日
御靈柩

御泊

佐野

二十九日

御靈柩

御泊

鹿沼

御留四日

四月四日

御靈柩

日光山御箸

右者^(抹消)

御靈柩当三月二十一日相州從

中原武州府中江被為^(行)遊

渡御候節木曾小野路関戸

外近村々一同府中江御繼

立仕候^{相勤}尤御休泊所御留

御日限并二供奉御役人中

得^トも相調聊相違無之

令筆記候以上

元和三年丁巳四月 拜書 有山源右衛門

元貞(花押)

右本書者先名主伊右衛門火災
之節致焼失写二御座候以上

関戸村

役人 伊兵衛

写書之

これは、徳川家康の霊柩を日光山に移送する際、「木曾小野路関戸外近村々一同府中江御継立仕候」として、関戸を含む近隣の村々が人馬の継立を求められたもので、史料の末尾には「元和三年丁巳四月 拝書 有山源右衛門 元貞（花押）」と見える。本文書の写しは二通あり、いずれも多摩市教育委員会が所蔵している。このうち、右の一通を写した杉田伊右衛門は、原関戸村の名主であったと思われる。

本史料からは、有山源右衛門の実名（諱）が「元貞」であったことが判明すると同時に、戦国時代に引き続き、有山源右衛門が地域の有力者であり、人馬供出にも関与していたことが分かる。

【史料⑧】 観蔵院薬師三尊像日光菩薩像像内文書

もうひとつの史料は、平成一五年（二〇〇三）、有山地区の曹洞宗寺院・観蔵院の薬師三尊像の修復時に日光菩薩像内から確認された像内文書である。像内からは、寛永二年（一六二五）と、明治一二年（一八七九）の二つの古文書が見つかった。このうち寛永二年の文書は以下のとおりである。

守本尊薬師如来

建長七乙卯年入仏画見

鎌倉従関戸号

家親

有山修理大夫

天正六戊子年二月入仏

有山左衛門尉元政

寛永二乙丑年十一月

有山源右衛門元貞

伝秀和尚入仏

建長七年（一二五五）と、天正六年（一五七八）、寛永二年（一六二五）に入仏供養がおこなわれたこと、およびそれに携わった代々の有山氏の名前が記される。筆跡がすべて同じように見えるので、文書そのものは寛永二年に書かれ、像内に納められたものと考えられる。

まず、建長七年の記述のうち「鎌倉従関戸号」という記載はわかりにくいのが、後述するように、明治一二年（一八七九）四月の「南多摩郡乞田村誌」には建長七年に有山修理大夫家親が鎌倉から移住したことが記されており、同じ内容を意味していると思われる。

天正六年（一五七八）二月に入仏供養したとされる「有山左衛門尉元政」については他に史料がなく不明である。時期的には、有山文書のうち①の文書の「有山源右衛門尉」と③の文書の「有山源右衛門」の中間に位置する人物となる。また、有山左衛門尉元政と有山源右衛門元貞は、諱が「元政」と「元貞」で「元」の字が通字であるので、親子・兄弟など

の血縁関係も想定できる。

最後に記載されるのが、寛永二年（一六二五）の入仏供養をおこなった「有山源右衛門元貞」「伝秀和尚」である。

有山源右衛門元貞は、寛永二年の中興開山の際の開基と考えられる。そして、先の史料⑦の「有山源右衛門元貞」と諱や登場時期が一致している。両者は同一人物と考えて良いだろう。

入仏供養をおこなった伝秀和尚は、寺方村の曹洞宗寺院・寿徳寺四世の和尚である。寿徳寺は多摩地域の曹洞宗寺院の本寺となる寺院であり、文禄三年（一五九四）または文禄四年（一五九五）に大福寺（現・多摩市貝取）、慶長四年（一五九九）に高西寺（現・多摩市連光寺）、寛永二年（一六二五）に観蔵院、その後東光寺（現・町田市）などを中興開山し、末寺とした。このうち伝秀和尚の時代に末寺となったのは、観蔵院と東光寺である⁽²¹⁾。

以上⑥⑦⑧の史料により、北条氏支配下の有山文書中に見られた有山源右衛門は、北条氏滅亡の後、関戸郷の検地案内人となり、家康の霊柩の継ぎ立てに携わり、観蔵院の開基となるなど、地域有力者であり続けたことがわかる。

また、史料⑥の検討により、有山源右衛門の案内範囲は一ノ宮村・上和田村には及んでおらず、史料⑥で扱われている「関戸郷」とは、関戸・寺方・乞田など城山を中心とする範囲であると推測できる。

有山源右衛門の実際の活動が分かる史料は、現段階では以上の八点である。なお、『新編武蔵風土記稿』には有山屋敷跡の説明として、「其子（筆者注・有山源右衛門の子）新右衛門が代に至り、故ありて家絶たりと」とあるので、次の代の新右衛門の時に家系が断絶したと考えられる。ただし、新右衛門の存在については、一ノ宮村の検地帳に同名の人物はいるものの、その確認は現段階ではできていない。

第三節 有山文書の伝来経緯の検討

次に、有山文書五通の伝来状況を確認しておきたい。これら五通の文書は、文化・文政期には関戸村の名主・相澤源左衛門が所蔵していた。そのようすは、『調布日記』『玉川披砂』『新編武蔵風土記稿』『武州文書』で知ることができる。

このうち、断簡である史料④を除く史料①②③⑤については、明治一二年四月の「南多摩郡関戸村誌」に、相澤良作が所持していると記されている。

相澤良作は、相澤伴主の子・忠主の養子である。養父・忠主の死後、明治六年～十一年の間に相澤家の当主となった。その後、相澤家の当主は忠主の孫・謙蔵（明治一一年～一四年）、忠主の養子・裕之（明治一四～一七年）、忠主の実子・志勤（明治一七年～三三年）とめまぐるしく交替し、志勤の子・孝平が関戸を離れ、子孫を残さなかったことで家は断絶する。⁽²²⁾ そのようななかで、時期は特定できないが、史料①③は杉田家に渡り、平成四年（一九九二）に多摩市教育委員会の所蔵となった。

一方、史料②④⑤の文書は、現在所在不明である。史料②⑤は「南多摩郡関戸村誌」に採録されているので明治時代までは相澤家にあったことがわかる。史料④は「南多摩郡誌」に採録されていないが、断簡であるために一点と捉えられず、採録されなかった可能性もある。現在は、史料②⑤同様、所在不明になっている。

文化文政期から明治初期にかけては、有山文書の所有者は相澤家であった。しかし、それ以前はどうであったのだろうか。

そこで注目されるのが、皇国地誌「南多摩郡関戸村誌」の記述である。⁽²³⁾ 「南多摩郡関戸村誌」には「本村農相沢良作北條氏ノ古書四通ヲ蔵ス、此書ハ、乞田村有山清左衛門方ヘ伝ヘシモノ、ヨシナリ」という記載がある。ここでは、有山文書の元の所有者を有山清左衛門としている。

有山清左衛門は、乞田村（現・東京都多摩市乞田）の旧家の当主である。『新編武蔵風土記稿』では乞田村の里正とし

て登場し、関戸郷に出された豊臣秀吉の禁制を所持していることが記されている。この秀吉禁制写は『武州文書』にも採録されている。「南多摩郡乞田村誌」では、秀吉禁制の写を載せた後に有山氏の出自について以下のような解説を付けている。

有山氏ハ本村（筆者注・乞田村）ノ旧家ニシテ其先魯ノ哀公ヨリ出ツ、有径氏ト号ス、其後裔有山某、建久年間源頼朝ニ仕フ、其孫ヲ修理太夫家親ト云フ、建長七年、九家親鎌倉ヨリ此郷へ移住シ子孫農ニ帰シ、三十世本村ニ住スト云²⁴

これによれば、有山清左衛門の有山家は、源頼朝に仕え、建長七年、有山修理太夫家親の時に移住したとされる。この記述は、先に見た観藏院日光菩薩像内文書（史料⑧）と一致する。これらの史料からは、当時、有山源右衛門と有山清左衛門の出自が、ともに有山修理大夫家親であると考えられていたことが判明する。

さらに、有山清左衛門に対しては、文久二年（一八六二）四月、観藏院から以下の文書が出されている（傍線部筆者）。

一札之事

一 当山観藏院之儀者貴殿御先祖有山源右衛門殿開基ニ而先年建立被致候処数年来之内度々修復等茂有之候処尚又此度大破ニ付惣旦家之者相談之上修復荒増出来致候得共未タ御本尊前之仏具一切無之候間前文之通御開基主御相談之儀ニ付寄進被頼候処早速承知之上鳥井三尺五寸之金燈籠一對奉納被成下猶又御分家中より茂品々奉納被下候所上納仕り然上者当寺什物ニ致永代相讓候此上紛失無之様世話人共立合大切ニ取持可致候為後日仍而如件

于時文久戊辰四月

原関戸村

観蔵院印

連光寺村

組寺

証人 高西寺印

原関戸村

大檀那

世話人 吉兵衛印

同

同 玄内印

乞田村

有山清左衛門⁽²⁵⁾殿

右の史料では、有山清左衛門に対して「貴殿先祖有山源右衛門殿開基」と述べ、本尊の仏具などの寄進を求めている。清左衛門はこの要請に他の親類とともに応じている。⁽²⁶⁾文久二年当時、観蔵院の開基が有山源右衛門であり、有山清左衛門が有山源右衛門の子孫であるということは、観蔵院と有山清左衛門の共通認識となっていたということができるだろう。こうしたことから、有山文書は、文化・文政年間に相澤家のものとして確認される以前は、有山清左衛門家にあった可能性が考えられる。また、元禄年間には「関戸村の有山清右衛門」が「古来之者」として寺方村の寿徳寺の由緒についての証言をおこなっていることから、⁽²⁷⁾近世前期の段階では有山姓を持つこれらの人々によって、中世の史料や伝承が受け継

がれていた可能性があるだろう。

第二章 「有山」の検討

第一節 字「有山」について

前章では、おもに古文書類から、有山源右衛門の事蹟および有山文書の伝来などについて整理・確認し、有山源右衛門の出自が乞田村の有山家と同じであることを述べた。

ここでは視点を現地に移し、有山源右衛門の屋敷があったとされる「有山屋敷」または「有山」という地について検討してみたい。

まずは「有山」の地勢について見ておきたい。「有山」と呼ばれる場所は、現在の多摩市東寺方一丁目にあたる。大正一四年（一九二五）の地図にも有山という集落名が見えており、おおよその範囲がわかる（地図1）。

有山地区は旧河床に囲まれた微高地にあたり、五〇～一〇〇メートルほど南を大栗川が流れる。大栗川の南には「城山」と呼ばれる河岸段丘がそびえる。城山の頂上付近は「天守台」と呼ばれ、戦の際に物見櫓が置かれたなどの伝承を持つ⁽²⁹⁾。文化年間には、ここに金毘羅宮（現・琴平社）が勧請された（地図1・2）。

一方、有山地区の約四〇〇メートルほど北側には多摩川が流れる。多摩川には現在、関戸橋と府中四ッ谷橋が架けられているが、かつては関戸の渡し・一の宮の渡しがあった。有山地区は、この関戸の渡しと一の宮の渡しの双方から伸びる道が交差する地点のやや西寄りに所在する。有山地区の東側には関戸の集落があり、旧鎌倉街道に抜けられる（地図1）。一方関戸の渡しから伸びる道は津久井道で、有山の西側から大栗川を越えて「ぐみヶ坂」を登り、寺方村・上和田村方面を抜けていく道につながる。また、津久井道を上和田村方面に行かず寺方村を南下すると、乞田村に到達する。こ

の乞田村まで抜けるルートは、鎌倉街道の裏街道と呼ばれる道であった（地図1参照）。

ぐみヶ坂を登った場所には宝泉院という新義真言宗の寺院がある。宝泉院は有山文書にも出てくる塩澤氏を開基とする伝承を持つ³⁰。宝泉院を南下すると、寺方村の集落や寺方村の鎮守・山神社、曹洞宗寺院・寿徳寺などがあり、さらに南西にはかつての落川新田と呼ばれる地区がある。

現在の多摩川は有山地区に比較的近い位置を流れているが、有山文書が書かれた頃には、より北側の府中用水付近を流れていたと考えられている³¹。しかし、慶長元年（一五九六）の大洪水により、流路が現在地付近まで南下した³²。有山文書のもっとも新しい年号のものは天正一六年（一五八八）であり、多摩川が南下する九年前にあたる。

有山源右衛門は③の文書で中河原村の正戒塚に新宿を立てたが、この正戒塚も多摩川の洪水で流失したと伝えられる。このように、有山地区は、南側の大栗川と、北側の多摩川に挟まれており、有山地区そのものは微高地上にあるものの、周辺は洪水の可能性にさらされた場所であった。

「有山」という言葉が地名として用いられた初期の例としては、寛永一四年（一六三七）の「寺方村名寄帳」があげられる³³。ここには「有山」「有山前」という地名が掲載されており、すでに地名として「有山」の名が用いられていることが確認できる³⁴。

有山源右衛門元貞の終見である寛永二年からわずか一二年後に「有山」という地名が名寄帳に取られていることからすれば、この地名は、有山源右衛門の存生期から存在し、受け継がれてきたと考えることができるだろう。現在でも住民は「有山の〇〇」と名乗るなど、「有山」の名称は伝承され続けている。

第二節 山神社の由緒書と祭礼

①「山神社由緒書」について

以上のような地勢に立地した有山地区は、村落としてはどこに属したのだろうか。そのひとつの手がかりとなるのが、有山地区が属する寺方村の鎮守・山神社の由緒書である（傍線部筆者）。

東京府武蔵国南多摩郡多摩村大字東寺方小字七百五拾五番地

社格村社

山神社

一祭神 大山祇命

由緒

旧紀曰寿徳寺持来ル所有地内江弘治三丁巳年三月廿八日開山和尚自ラ奉鎮座候事所藏之旧年代紀七拾二枚目紙面有之其後四代之傳秀和尚代ニ至リ徳川三代將軍様ヨリ右寺持来ル処之所有ヲ慶安元年戊子九月九日御朱印ニ頂戴仕候ニ付当寺之依為境内御朱印即チ為御朱印守護此度別而新ニ奉安置候山神者也時ニ村方原宿新田有山各四ヶ村之百姓衆面々氏神未相定故ニ□当寺之山神於願望ス依之拙寺免許ス自今以後当寺之山主堅ク可相守此旨者也云々 現住寿徳傳秀記スト有之候也

右寺所藏之旧年代紀七拾九枚紙面曰山神本体岩石ハ三代之弟子守□防山城国生国ヨリ持来リ是月三月九日檀頭氏子一同立合ニテ奉リ自今以後堅ク守護スベシ祭日ハ四月十七日ノ事也伝秀記スナリト 有之候事 如是ニ御座候也⁽³⁵⁾

山神社は、寺方村の曹洞宗寺院・寿徳寺に隣接する地（現・多摩市東寺方）に鎮座している。右に挙げた史料は、明治三十三年「山神社明細帳」であり、このなかに山神社の由来を記した由緒書が引用されている。由緒書は、観蔵院の開山を

おこなった寿徳寺四世の伝秀和尚（一六六四没）によるものと記されている。よって「山神社由緒書」の成立時期は、寿徳寺に御朱印が与えられ山神社が独立した慶安元年（一六四八）から、伝秀和尚が亡くなる寛文四年（一六六四）までと考えられる⁽³⁶⁾。

本由緒書によれば、慶安元年（一六四八）、寿徳寺に朱印地が与えられたことにより、弘治元年（一五五五）以来、寿徳寺の境内に鎮座していた山神を、朱印地の守護として別の場所に移転させたという。この際に山神社を祀ることになったのが、それまで氏神を定めていなかった「村方原宿新田有山各四ヶ村」であった。これは、「村方」（寺方村）、「原宿」「新田」「有山」と読み分けられ、この四か村が山神社を祀ったことが分かる。

ここで、それぞれの村を確認しておこう。まず「村方」とあるのは寺方村のことと思われる。寺方村は四ヶ村をまとめた全体の村域名としても用いられるが、小村として用いられる場合もある。小村として用いられる場合の範囲は、後述する元禄二年（一六八九）の裁許絵図（図6）を参考にすれば、山神社より北、宝泉院より南の街道沿いの東側の区域にある。た

新田村は、落川新田のことで、現在の多摩市落川付近である（地図2参照）。「新田」「落川新田」という名称は、文政三年（一八二〇）の史料⁽³⁷⁾以降しばしば見られるが、それ以前に「新田村」「落川新田」という名称が使用されていた事例は、現段階では筆者には確認できておらず、どの程度溯ることができなのかは不明である。

有山村は、先述のように東寺方一丁目付近である。

原宿村は、現在の地名には残っていないが、後述するように、後に「原村」と言われた区域と同じかその一部と思われる。元禄二年の裁許絵図（図6）によれば、その場所は寺方村と街道を挟んだ西側の地区である。また、後述するように、宝泉院も「原村」と呼ばれた史料があるので、原村に含まれる。

②山神社の祭礼

山神社由緒書に見られる寺方・原宿・新田・有山という四か村の組み合わせは、現在の山神社の氏子の構成とも一致する。

毎年九月の第一週におこなわれる山神社の祭礼では、現在も、宵宮では子ども神輿が落川新田地区と寺方地区を巡り、本祭では大人神輿と子ども神輿と太鼓が、寺方地区・旧原村地区・有山地区を巡行する。⁽³⁸⁾

本祭では大人神輿が出御するが、大人神輿は重量があり宝泉院前のぐみヶ坂を下ることが難しいため、寺方地区でトラックに乗せられて、「くるま堀公園」(地図2参照)まで運ばれる。一方、太鼓の行列はそのまま寺方地区からぐみヶ坂を下り、大栗川をわたって有山地区隣の「くるま堀公園」に到着する。

太鼓と神輿が「くるま堀公園」に揃ったところで、有山地区の中心部を通るようにして巡行がおこなわれ、昼前に聖蹟桜ヶ丘駅前郵便局に到着する。午後は外部の神輿担ぎも合流して、駅前の盛大な巡行がおこなわれる。神輿と太鼓は再び有山地区をめぐり、「くるま堀公園」に到着する。ここで神輿はトラックに乗せられ寺方地区に先に行き、寺方地区をゆっくり巡りながら還御する、という流れになっている。

山神社の祭礼ルートは、かつての四つの小村をたどったものと位置づけることができるだろう。

「山神社由緒書」に見られる四ヶ村は、寺方村を構成していた四つの小村であったと思われる。しかし、この四ヶ村はずっと四ヶ村であったわけではない。

「原宿村」と「有山村」は小村名としては消えていく。たとえば文政九年(一八二六)「山神御本社屋根替供養諸色入用帳」⁽³⁹⁾には、寺方村・原関戸村・新田村の三か村が記載され、「原宿」と「有山」の名がなくなっている。これは、原宿村と有山村が、原関戸村として示されるようになったためと考えられる。

有山地区について考えるためには、こうした近世の村名・村域の変化も踏まえる必要がある。特に有山村と原宿村は小

村名としては消えるので、その経緯も見ておく必要があるだろう。以下、有山村と原宿村（原村・原関戸村）の変遷を確認することにした。

第三節 村落名の変遷

① 有山村

各史料に見られる小村名を書き出した表が表2である。

有山が「有山村」と記されるのは、「山神社由緒書」のほかには、正保三年（一六四六）の「札下村目安」⁽⁴⁰⁾、承応元年（一六五二）の「内済証文」⁽⁴¹⁾や、万治二年（一六五九）の「野錢野札二付取極め手形」⁽⁴²⁾などがある。また、延宝九年（一六八一）「青柳村・関戸村川原論所絵図写」⁽⁴³⁾では、絵図上の「一宮村」の隣に「有山村」の記述があり、その位置が確認できる。

「有山村」は、寛永年間から寛保元年までの間、連光寺野（多摩市連光寺の入会地）に材木を求めて野札を持っていた村として、一ノ宮村、関戸村、青柳村または原村とともにその名が見えている。⁽⁴⁴⁾しかし「有山村」の野札は寛保元年（一七四一）以降、割り当てがなくなり、関戸村の源左衛門に割り当てられるようになった。このあたりで、入会権が有山村から関戸村に移ったと捉えられる。⁽⁴⁵⁾

この後、「有山村」という表記が見えるのは、宝暦元年（一七五一）二月の「受取（茶湯料金回向料として）」に、観蔵院が「有山村 観蔵院」と自ら記した史料のみである。⁽⁴⁶⁾すなわち、一八世紀半ばが有山村の名称および権利が変化する分岐点と考えられる。有山地区は村名としての「有山村」を名乗らなくなるが、その後は集落名「有山」として存在し、現在に至っている。

② 原宿村

「原宿村」という村名も、「山神社由緒書」のほか、有山村同様、入会地の史料に登場する。たとえば、連光寺野の「札名書之覚」(延宝九年(一六八一)～享保二年(一七二七)の部分⁴⁷⁾)や、正徳二年(一七二二)四月「関戸村有山村芝野札名書之覚」⁽⁴⁸⁾などである。現在のところ、「原宿村」の終見は、享保二年(一七二七)の「札名書之覚」である。

原宿村の位置については不明であるが、原村と同一かその一部である可能性が高い。原村の範囲については、元禄二年(一六八九)の裁許絵図(図6)に、寺方村と道を隔てた西側が、「原村」として図示されている。また、元禄一六年(一七〇三)「武蔵国多摩郡日野領寺方村宗門御改帳」⁽⁴⁹⁾に「真言宗原村宝泉院」という記載があり、宝泉院も原村の一部であることがわかる。元禄年間における原村の範囲は、寺方村から見て西北部の街道沿いから宝泉院付近ということになるだろう。

なお、宝泉院ご住職および山神社の氏子の方への聞き取りによれば、宝泉院の前方は「宿」と呼ばれていたという。これが「原宿」の名残であるとも考えられる。一方、承応元年(一六五二)十一月廿三日の内済証文には、証人として、「原ノ宿 寿徳寺」という記載が見える。⁽⁵⁰⁾「原ノ宿」が「原宿村」と同義で、寿徳寺の現在地も変わっていない場合、⁽⁵¹⁾寿徳寺は原宿村の一部ということになり、原宿村は寿徳寺から宝泉院近まで南北に広がっていたことになる。ただし、寿徳寺を原村・原宿村とする史料はほかになく、そもそも「原ノ宿」の解釈も難しい。今後、さらに他の史料を見て判断する必要があると思われる。

原村と原宿村は、登場している時期が重なっており、どこで区別をするのが難しい。原宿村の略称として原村という名称が用いられたか、あるいは原村のなかの限定された一地区を「原宿村」と称したのか、いずれの可能性も想定できる。いずれにしても、管見の限りでは「原宿村」の名称は享保二年(一七二七)、以降は見えなくなり、原村の名称も、宝暦二年(一七五二)あたりで見えなくなる。それとほぼ入れ替わるように出てくる地名が「原関戸村」である。

③原関戸村

原宿村・原村は、のちに「原関戸村」という名称に変わる。⁽⁵²⁾ 天保一三（一八四二）年九月の「岩堰山立木伐採り出入りにつき済口証文」⁽⁵³⁾には、元禄二年の裁許絵図（図6）を引用する際に「原村与唱候場所者当時之原関戸村二候へ者」と述べられており、原村が原関戸村に変化したことは明確である。

原関戸村の呼称が用いられた早い例としては、宝泉院の前に建立された享保四年（一七一九）建立の地藏菩薩像⁽⁵⁴⁾に見える「原関戸村」銘が挙げられる。一八世紀後半以降には、その他の文書史料でも「原関戸村」の呼称が多く見られるようになる。

原関戸村の範囲には、旧・原村のほか、旧・有山村も含まれる。有山地区にある寛政元年（一七八九）建立の庚申塔には「原関戸郷 有山講中」という刻字があり、⁽⁵⁵⁾ 有山地区が原関戸村の一部という自覚を持っていたことが窺われる。また、原関戸村の帳簿類には、有山地区の情報も含まれている。

原関戸村は寺方村のなかの小村であるが、原関戸村には名主が置かれ、原関戸村・寺方村がそれぞれ一村として表記されることもあった。一八世紀後半以降の有山地区は原関戸村の一部であり、大きな枠組みのなかでは寺方村のなかの原関戸村のなかの有山、という位置づけになるのである。

④ 「原村名寄帳（写）」の検討

それでは、原関戸村の前身である「原村」には有山区域が含まれていたのだろうか。これについては定かではない。延宝元年の「大丸村より掛馬草場出入二付連光寺村他返答書」⁽⁵⁶⁾では「有山村」と「原村」が併記されており、別の村として扱われている。⁽⁵⁷⁾ しかし、承応三年（一六五四）「原村名寄帳（写）」⁽⁵⁸⁾には有山の情報も含まれている。

「原村名寄帳（写）」の冒頭に登場する「九左衛門分」（表3 No.1）の右肩には「有山」の文字があり、九左衛門は有山在住者と思われる。九左衛門については、承応元年の内済証文にも「有山村 九左衛門」と見えており、年代的に同一人

物と考えて良いだろう。また、「内山」(表3 No.7)は史料⑥の文禄三年「(武)州多西郡関戸郷御縄打帳」にも見える名である。さらに「観藏院分」(表3 No.13)という表記も見られる。観藏院の所在地は有山地区(またはその隣接地)であるので、九左衛門・内山・観藏院の例をあわせて考えてみると、「原村名寄帳(写)」には有山在住者の情報が収録されていると判断できる。

また、試みに「原村名寄帳(写)」に記載された家の軒数を数えてみると、観藏院と法泉坊(宝泉院カ)の寺二軒を含めた一六軒が確認できる。これは『新編武蔵風土記稿』に出てくる有山八軒・原関戸二〇軒よりも少ない。しかし、元禄二年の裁許絵図(図6)上に見える原村付近と有山付近の家数を数えると、寺院を含めて一四軒ほどであり、ほぼ「原村名寄帳(写)」と一致する。

以上のことから、「原村名寄帳(写)」には、当時の有山地区についても含めて記載されていると考えられる。

「原村名寄帳(写)」の原本作成年代は承応三年(一六五四)であり、有山源右衛門元貞の終見である寛永二年(一六二五)の二五年後にあたる。「原村名寄帳(写)」には、その後の有山源右衛門・有山家の情報が含まれている可能性もある。

そこで「原村名寄帳(写)」の記載を見てみると、二種類の「源右衛門」という記載が見つかる。ひとつは「源右衛門分助太良」という源右衛門を分付主とする土地についての記載である(表3 No.5)。地名は「川田」「飯島」「とてん」「原」などがあり田畑壹町貳反七畝五歩、屋敷八畝一〇歩を所持していることが記される。しかし、この「源右衛門」についてはこれ以上のことは不明である。

もうひとつは「源右衛門子 長九良」という記載である(表3 No.16)。長九良の名は名寄帳の最後に記される。他の人物が多数の所持地を持っていることに比べ、長九良の所持地は「下畑貳畝十一分 居屋敷分」のみとなっている。屋敷地しか持たない長九良の状況は、『新編武蔵風土記稿』に有山家を断絶させた人物として登場する源右衛門子・新右衛門を

想起させる。しかし、新右衛門と長九郎では名も異なるし、「源右衛門」を名乗る同時代の同名の人物は多い。さらなる検討が必要であろう。

「山神社由緒書」にあるように、もとは寺方村・原宿村・有山村・新宿村の四つの小村が存在したが、このうち原宿村・有山村は一八世紀半ばで原関戸村と称されることを確認した。また、原宿村は原村という名称と平行して用いられ、原村に有山村が含まれる事例もあった。「原村名寄帳(写)」には有山地区の関係者が見えており、近世史料において有山地区を見ていくためには、寺方村だけではなく、原村・原関戸村の史料も見ていく必要があることを指摘したい。

第三章 有山屋敷の検討

第一節 有山区域の絵図の検討

明治以前の有山地区周辺をよく示している絵図として、「寺方絵図」⁽⁵⁹⁾と「岩堰龜絵図」⁽⁶⁰⁾の二つの絵図がある。「寺方絵図」は彩色されており、「岩堰龜絵図」は道のみが彩色されたものである。両者の構図はほぼ同じであり、同じ絵図を写したか、片方をどちらかが写して作成した可能性がある。

「岩堰龜絵図」は、天保一三年(一八四二)九月の「上和田村・寺方村江相掛候岩堰山不法出入二付済口証文」⁽⁶¹⁾の文書群のなかの絵図であり、少なくとも天保一三年以前の状況を示したものと考えられる。

一方、「寺方絵図」は明治八年(一八七五)の「第八大区九小区武蔵国多摩郡寺方村全図」の袋に他の絵図類とともに入れられていたものであり、明治期に作成されたか、あるいはそのための参考にされた絵図と思われる。「岩堰龜絵図」と「寺方絵図」を比較してみると、「寺方絵図」は彩色されて畑地と田地が明確で見やすいものの、「岩堰龜絵図」のほうが岩堰の描き方など詳細な部分が多く、時代的には古いものではないかと推測される。

そこで本稿ではおもに「岩堰庵絵図」を用いることにしたい。「岩堰庵絵図」の属する文書群には、岩堰そばの岩堰山の松木をめぐる争いが記されており、本絵図の作成もそれらの相論に伴うものである可能性がある。以下、絵図をみていこう。

絵図の作成動機が岩堰や用水堀の修繕がらみだったためか、絵図には水路が詳しく描かれている。また、絵図の中心には有山地区がある。岩堰から引かれた用水の終着点は、有山地区の八石田であり。そのため、有山地区が中心に来ているものと思われる。

有山地区は、畑と住居が描かれた部分にあたる。背後には複数の「有山田」と呼ばれる広大な田が広がる。有山田の背後（南側）には大栗川が流れ、大栗川以南には、若干の天水田が見える。一方、有山の北側には「五反田」と呼ばれる細長い三角形の田があり、五反田から北は一宮村との村境になっている。東側は関戸村の飛び地である。また、東南には、「八石田」という田があり、岩堰から引かれた用水堀は、この八石田のところまで流れ込む。

絵図に描かれた水路について見てみよう。絵図に見られる有山地区を構成する水路は四本（小さな分流を入れると六本）ある。四本の内訳は以下の通りになる。

【水路①】 岩堰から八石田まで東西を通る水路「用水堀」。有山地区の北端にあたる。

【水路②】 「用水堀」（水路①）と大栗川を南北で結ぶ水路。ぐみヶ下田と有山田の間を通り、有山地区の西端となる。

【水路③】 北側から八石田の脇を通り、大栗川に流れ込む水路。関戸村境と有山田の間を通る。有山地区の東端で、関戸村との境界線。絵図では「用水堀」（水路①）と結ばれていないか、あるいは、より細い水路で結節しているように見える。

【水路④】 「用水堀」（水路①）から南北に有山地区の中を通り抜け、そこから東方向に向きを変えて関戸村境に近い大栗川につながる。

以上の四本の水路のうち①②③の三本は、それぞれ有山地区の北・西・東の端を通り、有山地区の境界線を形成している。有山地区の中央を抜ける水路④は、途中で東に曲がり有山田の間を通り、有山田を灌漑する。有山田の南側には大栗川があり、田を含めた有山地区の南の境界は大栗川と考えることもできる。

以上のように有山地区は水路に囲まれて成立している。有山地区周辺には、自然の雨水で成り立つ「天水田」は大栗川の南にしかない。有山地区は水路による人工的な灌漑があつて初めて成り立ったものと考えられる。

では、これらの水路はすべて同時にできたのであろうか。この点については今後の検討が必要と思われるが、少なくとも水路③は、絵図上では岩堰からの用水堀（水路①）に結びつけられていないように見え、岩堰からの用水堀に先立って開削された可能性もあると考えられる。

一方、大栗川と用水堀をまっすぐ結ぶ水路②は、用水堀と結ぶことを目指して作られていることから、用水堀の存在が前提となつて見えるように見える。

これらのことから、現段階では、まず関戸村境の水路③が先行してつくられ、同時かあるいは少し後に岩堰からの用水堀が引かれ、さらにその後、西側の水路や、有山地区内を縦断する水路が引かれたものと推測しておく。

岩堰からの用水堀は、八石田を目指して引かれており、有山地区の灌漑を目的として引かれたものと考えられる。有山周辺の水路や、岩堰の開削年代は不明であるが、後述するように元禄二年（一六八九）に岩堰をめぐって相論がおこっている（図6）、それ以前に溯ることは確かである。

第二節 空中写真・公図との対比

①空中写真と絵図の比較

岩堰絵図は、比較的正確に描かれており、米軍や陸軍による空中写真との対比でほぼ場所を確定できる。有山地区南

側の大栗川の流路は、昭和十九年（一九四四）十一月から昭和二〇年（一九四五）一月までの間に、河川改修により大幅に変化するが、旧流路は道や住宅地が立つなどしてその地形を留めている。

昭和二年（一九四七）八月の米軍撮影の空中写真（図3）⁶³は、河川改修後のものだが、画像が鮮明であるため、絵図との比較がおこないやすい。これを用いて絵図と対照し、絵図中の地名を入れてみることにする。

河川改修がおこなわれたため、大栗川を渡る橋が異なっているが（絵図では旧流路にかかる橋（ぐみヶ下橋）が描かれ、空中写真では新流路の橋（東寺方橋）に変化しているが、ぐみヶ下橋も残存している。⁶⁴）、五反田・八石田や、関戸村分の畑などは、絵図と同様の形状を保っており、位置の特定ができる。大栗川の岩堰の流路が絵図の時よりも変化しているようにも思われるが、岩堰から出た用水堀は、飯島を通り、有山地区、そして八石田に通っていることが明確に分かる。

空中写真の、五反田近くの用水が集中する部分に写る白いものは水車小屋である。水車小屋の位置に水路が集中しており、この場所が有山地区の水路の集合地点であると思われる。

水車小屋と用水堀周辺は、区画整理事業の際に公園化され、水路は暗渠となって上部が緑道に整備され、現在は水車小屋があったことに因み「車堀」の名称がつけられ「くるまぼり公園」「くるまぼり緑道」と呼ばれている。山神社の祭礼の際には、このくるま堀公園に神輿が運ばれ、ここから有山地区の巡行が始まるのは前述の通りである。

②公図を用いた検討

有山屋敷があった場所は、このうち有山地区の畑と住居があった場所と考えられるが、この部分は木々に覆われており、空中写真を見ても明確に区割りなどがわからない。

そこで、現在の公図を用いて、水路や、水路跡が道路になったと思われるものを確認してみることにした（図4）。有

山地区のなかには現在も水路が残っているが、新しい道が水路を分断している部分も見られる。また、途中まで水路でありながら、水路の延長線上が道になっているところもあった(図5の①②③の部分)。そこで、水路の延長上が道になっている部分は、かつて水路だった可能性のある場所と考え、それらの水路と道をピックアップし、空中写真に重ねてみた(図5)。

すると、集落のなかに一部クランク状の道が確認できる(①付近)。住宅地のための区画上作られた道にも見えるが、水路の延長線上にあることから元水路の可能性も考えられる。元水路だとしても、田地の水路であった可能性も考えられるが、①付近は畑地であった部分で、ほぼ有山屋敷と呼ばれてきた場所に近い。先の「岩堰麓絵図」で確認してみると、集落の家の周りに点線が引かれており、何らかの区割りがされていたことが見て取れる。この付近は追加で家を建てたことなどが古文書にあり⁽⁶⁵⁾、絵図の点線が後年に形成された敷地の境界線なのか、より古い水路や空堀、土塁などを示したもののなかはさらに検討が必要だろう。

天水田の乏しい有山地区は、用水路をひくことなしに田の開墾はできなかった場所と思われる。岩堰の開削年代は不明であるが、水路の終点が八石田であることから、有山地区を灌漑することを計画して引かれた用水であることは明白である。また有山家が源右衛門元貞の次の代で断絶したと伝えられていることを考えると、それ以前の、有山家・有山村が力をもっていた時期に少なくとも開削に着手していた可能性が高いのではないだろうか。

岩堰が史料上初めて登場するのは、元禄二年(一六八九)の裁許絵図(図6)においてである。そこで次にこの裁許絵図を見てみたい。

第三節 岩堰をめぐる相論

元禄二年（一六八九）に、岩堰山の材木をめぐつて相論が起きた。この相論にあたっては裁許絵図がつくられている。裁許絵図の裏書には、以下の通り記されている。

武州多摩郡上和田村・寺方村与同郡原村堰傍芝間論之事、上和田村地内ニ有之岩堰、自先規原村・寺方村田地用水ニ引来候故、於堰傍之芝間松枝を伐古芝を取、毎致堰普請来候、依之自上和田村茂松木立置下草□（等カ）上和田村之者苅取候处、去々年之冬原村百姓彼方地頭林之由申掠、従大勢松枝伐取由、上和田・寺方両村之者訴之、原村百姓答候者、堰場并芝間之地者原村之同領関戸村分ニ相極り、芝間之松為地頭林由申之、右遂糺明处、論所廻り皆上和田村之地続ニ而、聊関戸村分と不相見、持村を隔為原村地頭林由申段無謂、其上延宝九年荒川村諍論之節差出候証文之趣、堰普請之節「一芝取候由」「一此度地頭林申偽段不届ニ付、為過怠庄屋壹人令牢舎了、向後先例之通堰普請之節、於右之芝間松枝を伐古芝可取之、其外原村之者枝木下草共一切不可取之、尤上和田村之者為地元間如有来下草可苅之、仍為後証絵図令裏書、各加印判双方江下置之者也

元禄貳年己巳六月廿五日

稲五郎左衛門（印）

松 美濃（印）

甲斐飛驒（印）

本 紀伊（印）

戸 能登（印）

酒 河内（印）⁶⁶

上和田村地内にある岩堰は、以前より、原村と寺方村の田地用水として引いてきたが、堰のそばの芝間において松枝や古芝で堰普請をおこなってきた。そのため、上和田村も松木や下草などを刈り取ってきたが、一昨年の冬に原村百姓が彼方の地頭林であると偽りを謂い、大勢で松枝を伐り取ってしまったので、上和田村と寺方村が訴えたものである。

これに対して、原村の百姓は、「堰場と芝間の地は原村の同領である関戸村分と決まっており、芝間の松は地頭林である」と述べた。そこで、糺明したところ、問題の地（岩堰山）はすべて上和田村の地続きであり、いささかも関戸村分には見えなかった。持村を隔てて原村の地頭林であるという申し立ては謂われない。（中略）今回地頭林と偽りを申したことは不届きであるので、罪過として、庄屋一人を牢屋に入れる。今後は先例の通り、堰普請のときには右の芝間松枝を伐り、古芝を取りなさい。そのほか、原村の者は枝木下草ともに切り取ってはならない。もったも上和田村の者は地元であるので、下草を刈っても良い。

以上のような裁許結果になり、原村は全面敗訴した。ここで裁許絵図（図6）のほうを見てみよう。

用水路は岩堰から取水された後、まっすぐに観蔵院と八石田のある場所までのびている。その間、いくつか用水路は分岐して各地区の田畑を潤している。その途中の田は各村の分田となっており、すべて村名が異なっている。

用水堀沿いで岩堰にもっとも近い場所には関戸村畑があり、その隣が原村分田である。さらに隣は関戸村分田、そして寺方村分田となる。有山のうち観蔵院に近い付近は寺方村分田となっているが、より西の有山橋に近い場所は関戸村分田がある。

つまり、有山に至る用水堀の周辺は、元禄年間には原村・関戸村・寺方村の各田畑が入り交じった場所になっていたのである。各村々の分田が置かれた理由については、さらに調査が必要であるが、開発以前には入会地的な場所であった可能性や、用水堀の開削に複数の村々がかかわった可能性などが考えられる。

相論の際に原村は、あえて関戸村や地頭を引合いにだして権利の主張をおこなっている。この一見無理筋に思える「関

戸村の権利」という主張も、開削にともなう経緯で、原村と同じ領主を持つ関戸村が一定の役割を果たすなどそれなりに根拠のあるものであった可能性もある。

本裁許絵図(図6)には「有山」や「有山村」という言葉は全く見られない。この時の有山地区の立場は不明であるが、有山田のある場所は「関戸村分田」と記されており、関戸村として捉えられた可能性もある。また、先の検討の通り、原村に有山村が含まれる場合は、訴訟の当事者だった可能性もある。

おわりに

以上、有山文書を残した有山源右衛門とその屋敷・集落について検討をおこなってきた。

有山源右衛門は観藏院の開基であり、有山地区周辺には岩堰をはじめとする灌漑水路の開発があった。有山氏の名を冠した「有山田」などは、有山氏の開発によって成立した田であることを示すものだろう。こうしたことは、有山地区が、有山源右衛門によって新たに開発された土地であったことを示している。

有山地区が新規に開発された場であると考えと、さらにいくつかの課題が浮かぶ。そのうちひとつは、開発される以前の有山地区はどのような場であったか、ということである。有山地区およびその周辺は村落名などが変わりやすく、各村々の権利も入り組んでいた。河川の変動の影響を受けやすい場ということもあるが、開発される以前に入会地だった可能性や、別の村落名があった可能性も探るべきであろう。

もうひとつの課題は、有山氏の本拠地についてである。有山地区が新規開拓地の可能性が高い以上、有山氏には別の本拠地があったはずである。たとえば、同じ先祖伝承を持つ有山清左衛門のいた乞田村や、「古来之者」である有山清右衛門がいた関戸村などがその候補になるのではないだろうか。

有山源右衛門がどの場所に本拠を置いていたかということは、有山文書の解釈にもかかわってくると思われる。有山文書には「市場」「宿」「関」などの記述がある。しかし、本拠がどこであったかよって、解釈や場所の想定は変化する。

少なくとも、史料③に見える「中河原の正戒塚」の開発は、有山地区を足がかりとしている可能性がある。よって③以降は有山地区開拓後の有山源右衛門に出された可能性が高い。

しかし、それ以前の史料①の「関戸宿中商人問屋」に関する文書や、史料②の六斎市の文書については、有山地区開拓後であった可能性もあるが、それ以前だった可能性も同程度ある。両方の側面から検討していくことが必要だろう。

なお、開発後のものである可能性が高い史料④⑤の文書では、関銭徴収の権利が有山源右衛門に認められている。鎌倉時代の関所の位置は、鎌倉街道沿いの霞ノ関南木戸柵跡のある熊野神社であったとされる。⁶⁷しかし、この場所は有山地区からは離れており、有山氏が関銭徴収を申付けられる場所としては違和感がある。有山源右衛門が関銭徴収を認められた「関」は、より有山屋敷に近い場所にあった可能性もあるだろう。

本稿では、有山文書・近世の有山氏、小村名の変遷、祭礼のルート、絵図・写真などから有山地区の構成と性格を考え、それを通じて有山源右衛門の性格について検討した。

有山村や原宿村の実態をはじめ、岩堰周辺の権利関係など、未解明な部分が多いが、それらは今後の課題としたい。また、今回は触れられなかったが、有山文書および関戸郷の検討においては、中河原村（現・府中市）の検討が欠かせないと思われる。中河原村は、一五世紀の鶴岡八幡宮の外方供僧による記録「当社記録（香蔵院珎祐記録）」（國學院大學図書館所蔵）に関戸郷の一ヶ村として登場する村でもあり、有山氏が新宿を開いた場所でもある。しかし、寛永一〇年（一六三三）以降、その一部が連光寺村内の地として新田改や年貢割付帳などに登場し、⁶⁸万治二年（一六五九）以降は下川原という名称に変化する。⁷⁰一方で中河原村として続いた場所もある。多摩川の流路の変動もあいまって、地名・範囲の変化や洪水による土地の変化が激しい場所であるために実像がつかみにくい⁶⁹が、有山源右衛門による開発も、鶴岡八幡宮による

関戸郷支配も、中河原村がキーとなっている。今後は中河原村についても検討するとともに、各検地帳や岩堰などの検討をさらに進めてみることで、有山氏そしてさらには中世の関戸郷の範囲などについても手がかりが見いだせるのではないかと考えている。



地図1 文禄3年検地帳に登場する地名の比定地

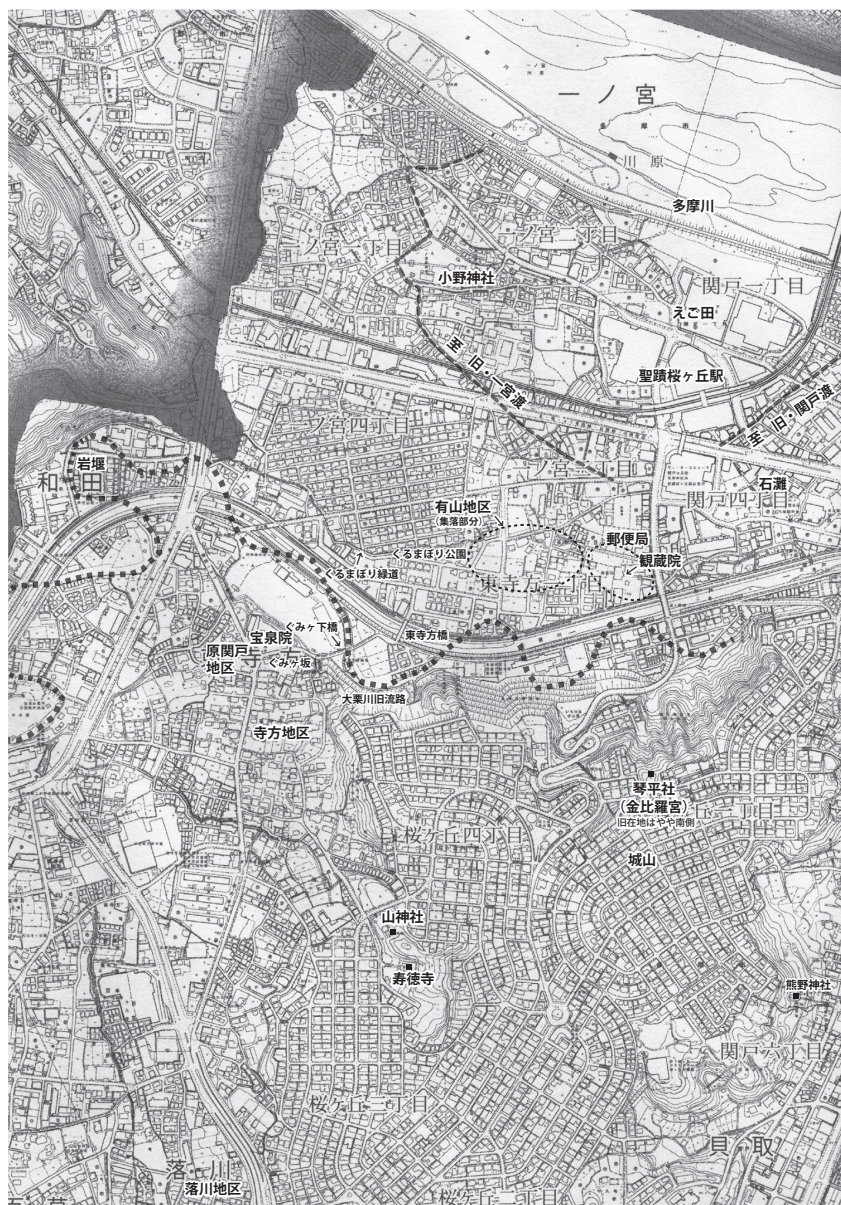
○ 「関戸之内上和田村御縄打水帳 (写)」所載地名 ◐ 「武州多西郡一宮御縄打水帳 (写)」所載地名 ● 「武州多西郡関戸御縄打水帳 (写)」所載地名

・大正10年測図・大正14年作成 2万5千分の1地形図「豊田」(大日本帝国陸地測量部他1984『大正・昭和 東京周辺1万分1地形図集成-京葉・京浜・多摩地区-』柏書房)を拡大して使用。

・地名の一部は『多摩市の町名』および聞き取り調査を参考に筆者が追記した。

・「新道」は『多摩市の町名』では「新堂」となっている。

・比定地がわかる地名に関してのみ、検地帳の登場順に付番した。



地図 2 現在の有山地区周辺図

※平成 24 年作成 1 万分の 1「多摩市全図」(東京都 1/2500 地図の縮小版)を縮小して使用



地図 3
山神社宵宮の
子ども神輿の巡行経路

※平成 24 年作成 1 万分の 1「多摩市全図」を縮尺を変更して使用

表1 関戸周辺における文禄3年の検地帳の検地実施日と地名

	関戸之内上和田村御縄打水帳(写)	(武) 州多西郡関戸郷御縄打水帳(写)	武州多西郡一宮御縄打水帳(写)
冊数	5冊	9冊(1冊現存、1冊表紙のみ残存)	5冊
案内人	柚木源右衛門・十左衛門	有山源右衛門	小左衛門内蔵助・大田藤十郎・井上善蔵
御出役	樋口又兵衛・石場宮内助・井上新平	中川諸之助・鳥居加賀・丹羽藤内	桑島万機・中山助六(御地頭衆)
10月11日	①祢もも	①大くりはた→大くり→大栗→川はた→大栗→大くり→川ふち→ゑこた→いしなた→ゑこた	
10月12日	②山内→下河内		
10月13日	③塚原→竹の下→大栗字竹の下→大栗→御いち→まげし(まばしヵ)→新道→倉沢		①前田→萩原→前田→萩原→向田(ムカイダ)→まへた→向田→前→こミ弥(小峰) ②まいだ→まへた→桑原→こミ弥(小峰)→まへ田→かふ木→後田→いり寺→北田→河原→後田→まとの上→後田→くほ田→たかきし→北田→□(虫損)田 ③川原→河原→ねき田→池田→河原→祢き橋→鳥居戸→宮下→杉かさき→三反田→舟田→根田→萩原→四反田→萩原→ミ之まへ→屋敷まへ
10月14日	④堂下→下原→下原後→下原前→下原→川根→前河内		④森の根→大畑け→外向→萩原→屋敷まへ
10月15日	⑤中尾→池田→梨子木田→ぶたい→中尾→とぼり→屋敷前→かいと田→東駒→やしきまへ		
10月18日		(表紙のみ)	

表2 「有山」「原宿」「落川新田」「寺方」の村落名の変遷

	史料名	年代	西暦	有山村の名称	原宿村の名称	落川新田村の名称	寺方村の名称
1	慶長 17 年落川乞田之郷原閭戸名寄帳	慶長 17 年	1612		原		
2	寛永 14 年寺方村名寄帳	寛永 14 年	1637	有山			寺方村
3	寺方村乞田村野出入につき裁許状	正保 2 年	1645				寺方村
4	正保三年札下目安	正保 3 年	1646	有山村			
5	山神社由緒書	慶安元年～寛文 4 年カ	1648 ～ 1664 カ	有山村	原宿村	新田村	村方
6	内済証文	承応元年	1652	有山村	原ノ宿 寿徳寺		(原ノ宿 寿徳寺)
7	原村名寄帳	承応 3 年	1654	有山	原村		
8	野銭野札ニ付取極め手形	万治 2 年	1659	有山村			
9	大丸村より掛馬草場出入ニ付連光寺村他返答書	延宝元年	1673	有山村	原村		
10	青柳村・閭戸村川原論所絵図写	延宝 9 年	1681	有山村			
11	日野助郷高取極めにつき証文	貞享元年	1684				寺方村
12	上和田村・寺方村与原村争論ノ岩堰普請方ニ付裁許状	元禄 2 年	1689		原村		寺方村
13	寿徳寺由緒につき有山筑後子孫三人連印口上書	元禄 6 年	1693				
14	武州多摩郡日野領寺方村宗門御改帳	元禄 16 年	1703		原村 宝泉		寺方村寿徳寺
15	養子縁組につき持参金請取証文	宝永 5 年	1708		原村		
16	閭戸村有山村芝野札名書之覚	正徳 2 年	1712	有山村	原宿村		
17	地藏菩薩(宝泉院門前)	享保 4 年	1719		原閭戸村		
18	札名書之覚	享保 12 年	1727		原宿村		
19	札名書之覚	元文 4 年	1739	有山村			寺方村
20	受取(茶湯料金回向料として)	宝暦元年	1751	有山村 観蔵院	原閭戸村		
21	質物相渡申田地之事	宝暦 2 年	1752		原村		
22	畑方御年貢取附帳	天明元年	1781		原閭戸村	落川村	
23	武州多摩郡原閭戸落川宗門人別帳	天明 6 年	1786		原閭戸村	落川村	
24	庚申塔	寛政元年	1789	原閭戸郷 有山			
25	寛政 8 年閭戸村御名寄帳	寛政 8 年	1796	有山	原		
26	米売渡前金証文之事	文政 3 年	1820			落川新田村	
27	山神御本社屋根替供養諸色入用帳	文政 9 年 2 月	1826		原閭戸村	新田村	寺方村
28	位階免許状之事(亡霊之位階ノ為)	文政 12 丑年 3 月 8 日	1829	寺方村 観蔵院			
29	石祠	天保 5 年	1834		原	新	寺方
30	入置申一札之事(本山修覆金ノ内四両二分借用ニ付)	天保 10 年	1839	寺方村観蔵院	原閭戸村 玄内		
31	借用申金子証文之事(金四両二分)	天保 10 年	1839	原閭戸村 観蔵院			
32	岩堰山立木伐採り出入につき済口証文 〔「原村与唱候場所者当時之原閭戸村二候へ者」の記載あり〕	天保 13 年 9 月	1842		原村 = 原閭戸村		
33	為取替一札之事	嘉永 3 年	1850	原閭戸村 幡次郎			
34	為取替申儀定一札之事	年未詳	-	有山組合			寺方村
35	糸蘭商売仕法取纏めにつき議定書	嘉永 5 年	1852		原閭戸村	落川村之内新田	寺方村
36	一札之事(観蔵院修復ニ当り御本尊前仏具寄進下サルニ付)	文久 2 戊正月	1862	原閭戸村観蔵院			
37	地藏菩薩	文久 3 年	1863		原セキド	□新田	寺方

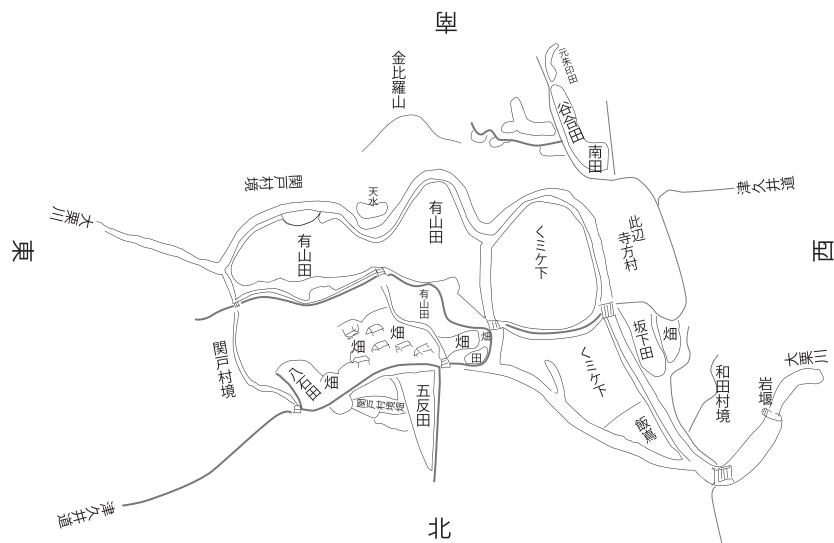
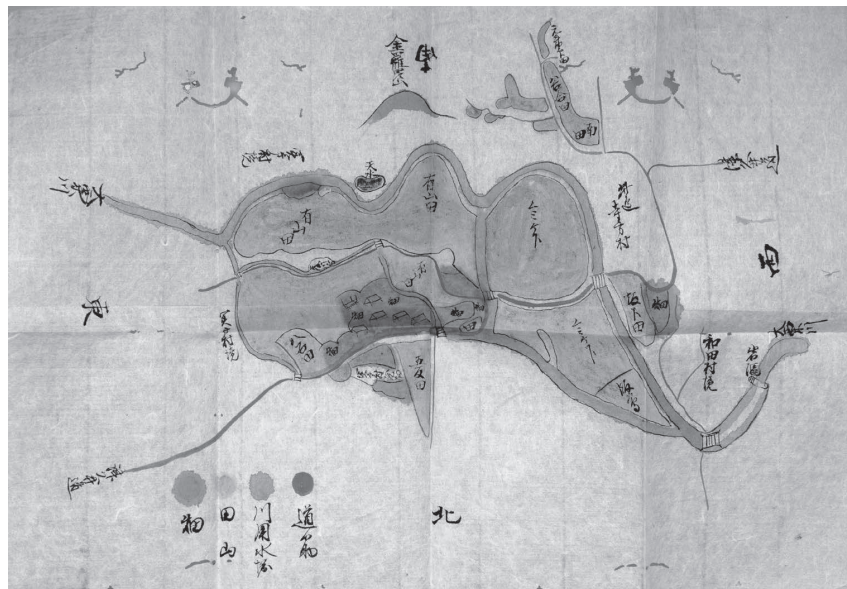
表 2 の出典名は以下の通りである。

1. 神立 (注 10) 論文所載
2. 3、5、12 ～ 15、27 国文学研究資料館佐伯家文書
4. 6、8、9、18、19 安澤 (注 40) 論文所載
7. 10、11、20、22、23、25、26、28、30、31、33 ～ 36 多摩市教育委員会所蔵
16. 人間文化研究機構国文学研究資料館富沢家文書
17. 29 「多摩市の石仏」『消えた寺が語るもの』所載
24. 「多摩市の石仏」所載
21. 藤井家文書 (多摩市教育委員会編『多摩市文化財調査資料 文書編』1978-80 所載目録より)
32. 伊野家文書 (『多摩市史 資料編二 近世 (社会経済)』より)
37. 「消えた寺が語るもの」所載

表3 「原村名寄帳(写)」の内容

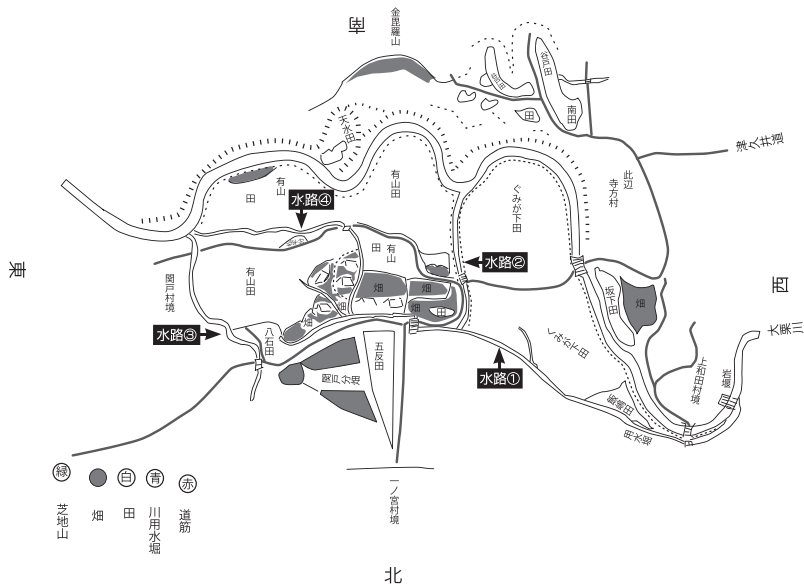
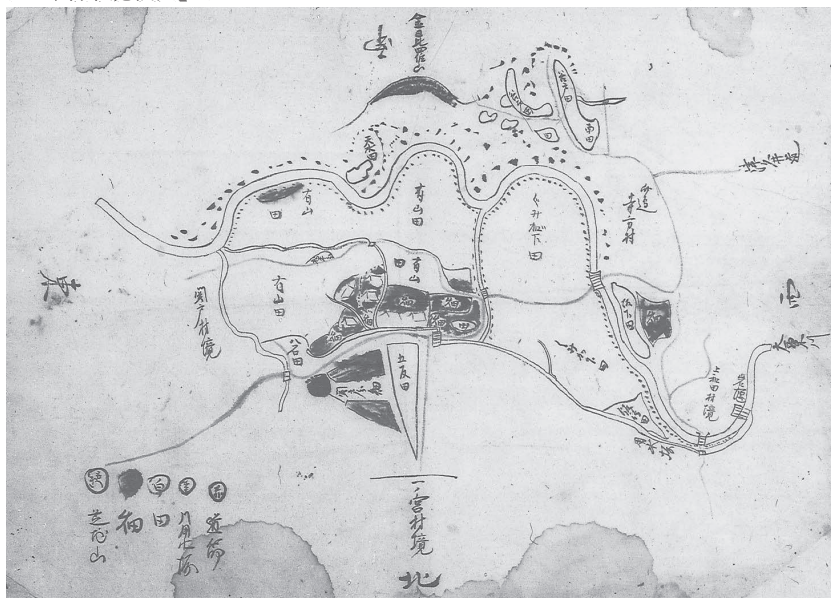
[illegible]

図1 「寺方絵図」(多摩市教育委員会蔵)



寺方絵図のトレース図 ※「寺方絵図」(多摩市教育委員会蔵)をもとに筆者作成

図2 「岩堰亀絵図」(人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵佐伯家文書) ※二次使用不可



「岩堰亀絵図」のトレース図

※「岩堰亀絵図」(人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵佐伯家文書) もとに筆者作成。水路の表記を加筆。

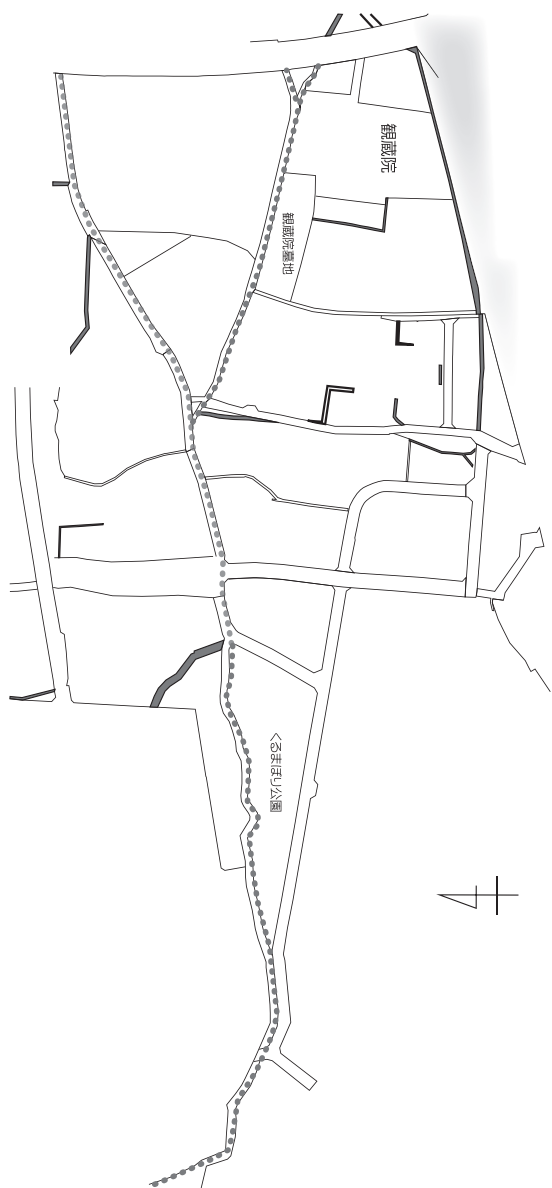
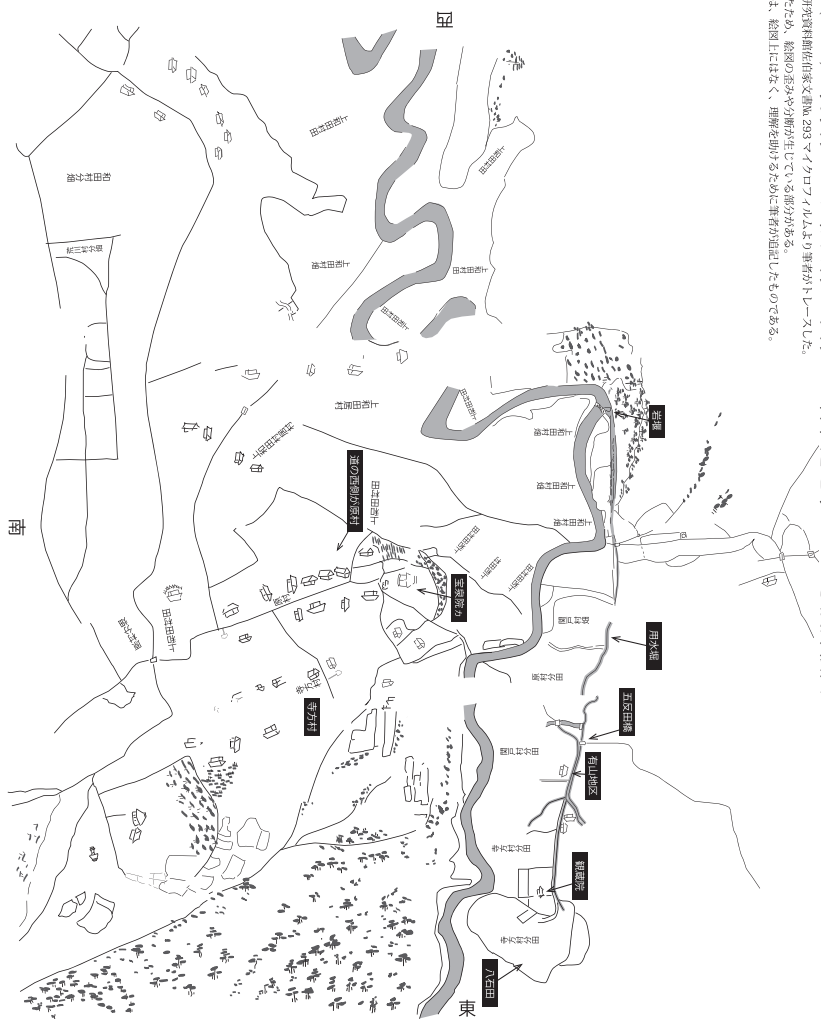


図 4 2014 年 7 月取得 公園（土地区画整理所在図）から抽出した水路と道路

- 水路（公園に「水」という表記があるもの）
- 現在は道になっているが、水路の延長線上にあり、元は水路だった可能性があるもの
- 道（公園に「道」という表記があるもの）
- 公園には「水」という表記が無いが、現地で、暗渠や公園の水路として確認できるもの

図6 元禄2年(1689) 寺方村・上ヶ和田村と原村との岩堰芝地争いにつき裁許絵図

人間文化研究機構国文学研究資料館蔵(作家文庫蔵) 253 ヴィンクワイルムより筆者がトースした。
 ※破れている場所があったため、絵図の読みや分断が生じている部分がある。
 ※黒い四角で記した言葉は、絵図上にはなく、理解を助けるために筆者が追記したものである。



注

- (1) 有山源右衛門については古くは豊田武「中世の間丸」(『社會經濟史學』6(1) 一九三六年)の表に見えるほか、菊池山哉『東国の歴史と史跡』(東京史談会、一九六七年)、池上裕子「伝馬役と新宿」(『戦国時代社会構造の研究』校倉書房 一九九九年)、佐脇榮智『後北条氏と領国経営』(吉川弘文館 一九九六年)、阿部浩一『戦国期の徳政と地域社会』吉川弘文館 二〇〇一年)らにより、商人問屋・伝馬役などについての事例として取り上げられてきた。また、史料④は黒田基樹「中近世移行期の大名権力と村落」(校倉書房、二〇〇三年)でも触れられている。有山源右衛門についても詳しく検討を加えているのは多摩市史編集委員会『多摩市史 通史編一』(多摩市、一九九七年)第三章(釈迦堂光浩・福田英一執筆)である。また、パルテノン多摩歴史ミュージアムでは、『多摩市史』の記載や聞き取り調査をもとに特別展を実施し、その内容を「関戸合戦」多摩市関戸に残る中世の伝承とその背景」(多摩市文化振興財団 二〇〇七年)にまとめた。有山源右衛門を含む周辺の在地土豪と寺院の関係については、拙稿「多摩市の中世寺院と在地土豪」(多摩地域史研究会「多摩・中世寺院の諸様相」二〇一二年)で報告した。
- (2) 『日本歴史地名大系 東京都の地名』(平凡社、二〇〇二年)の「有山屋敷跡」の項にて灌漑施設の集中が指摘さ

れている。

- (3) パルテノン多摩歴史ミュージアム『消えた寺が語るもの』多摩市の廃寺と寿徳寺の周辺」公益財団法人多摩市文化振興財団 二〇一二年 三六頁
- (4) 多摩市史編集委員会『多摩市史 資料編三 近代』(多摩市、一九九六年)第三章第三節 二七六頁～二八四頁
- (5) 福田榮次郎氏の提唱による。多摩市有形指定文化財としての名称は「関戸文書」であるが、有山源右衛門宛の文書であることから「有山文書」の名称がふさわしいとした。『多摩市史』では「有山文書」の名称を採っており、筆者もそれに従う。
- (6) 翻刻は、『多摩市史 資料編一 古代・中世編』を参考にした。史料の解釈にあたっては、注(1)の各文献を参考にしている。
- (7) 関戸が関所であったことは『曾我物語』(真名本)に登場するのが最初である。源頼朝が関戸宿に宿泊し、かつて平将門がこの地に設置した関所を藤原秀郷が「霞ノ関」として打ち破った故事を思い出すというエピソードが描かれている。「霞ノ関」は東国を示す言葉としてさまざまな歌に詠まれており、多摩市の関戸のほかにも候補地がある。『宴曲抄』「善光寺修行」では「小山田の里」(町田市小野路)、「霞ノ関」「武蔵国衙」(府中市)という順に読まれていることから、少なくとも「霞ノ関」のひとつは関戸であったと思われる(峰岸純夫「中世東国の庄園公領と宗

教』吉川弘文館、二〇〇六年、多摩市史編集委員会『多摩市史 通史編一』第五編第一章、多摩市、一九九七年。

なお、関戸の熊野神社境内からは、昭和三四年（一九五九）の菊池山哉による調査で柱穴跡が発見され、鎌倉時代の関所の跡「霞ノ関南木戸柵跡」として東京都指定史跡とされた（菊池注（一）前掲書）。また、近世に刊行された地誌『江戸名所図会』『武蔵名勝図会』『新編武蔵風土記稿』や相澤伴主著『関戸旧記』などにも、関戸に関所があった旨が記されている。

- (8) 黒田基樹「有山源右衛門尉」「有山源右衛門」（『戦国人名辞典』吉川弘文館 二〇〇六年）、『多摩市史 通史編一』第五編第三章第三節、一九九七年、七五二頁～七五三頁

- (9) 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵佐伯家文書 No

一

- (10) 神立孝一「多摩市域の検地関係資料（二）」（『ふるさと多摩多摩市史年報』No.9 一九九九年）

- (11) 「大栗」に関しては、多摩市都市整備部都市計画課編『多摩市の町名』（一九九二年）に上和田村側の岩塚に近い場所に「大栗」という地名があてられている。しかし、大栗川の流路沿いのどの地点でも「大栗」と呼ばれる可能性がある上、岩塚付近は「いしなた」「ゑこた」などからかなり離れている。池上裕子は「検地帳の小事の記載順には、現在残る小字名からみて連続性があるように思われる

部分が少なくない」と述べており（池上裕子「武蔵国荒川郷と荒川柴」（池上裕子編『中近世移行期の土豪と村落』岩田書院、二〇〇五年、二七頁）、地名の連続性からすると、本検地帳に見られる「大栗」「大くりはた」「川はた」「川ふち」も「いしなた」「ゑこた」により近い場所である可能性があるだろう。

- (12) 多摩市都市整備部都市計画課編『多摩市の町名―市政施行二十周年記念―』一九九二年 ほか

- (13) 多摩市一ノ宮山口家文書

- (14) 多摩市教育委員会所蔵

- (15) 『多摩市の町名』には「新堂」の比定地はあるが、「新道」という地名は収録していない。音が同じであることと、倉沢に近いことから、今回は「新道」と「新堂」が同じ地名を示すと解釈した。

- (16) 関戸郷の検地帳のうち、欠けている部分が上和田村や一ノ宮村の検地帳である可能性も検討してみたが、関戸・上和田・一ノ宮村の検地では、案内人および担当者がすべて異なっており、なおかつ上和田村と一ノ宮村は同じ日に検地が実施されている。関戸郷の検地帳は欠けている冊数が多いものの、最後に見える表紙の断簡が最初に検地があった一〇月一日から数えて八日後の一八日の日付になっている。全九冊であることからすれば、一日から一八日の間は検地が継続されていたと考えられる。すると、関戸郷・上和田村・一ノ宮村の検地は、同時期に別々の担

当者によって実施された可能性が高い。よって、関戸郷の検地帳のうち欠けている八冊に記載された場所は、一ノ宮村と上和田村以外の区域になると推測できる。

(17) ただし、給人側の佐伯姓は一ノ宮村・関戸村・乞田村・寺方村にも広がる姓である。また、上和田村の検地帳には「図書」という人物があり、④文書に給人として出てくる深谷図書助である可能性もある。さらに関戸郷と上和田村の検地帳では「ぬいの助」(縫之助)という人物が共通して出現する。上和田村の検地帳は後世の写しであるが表紙に「関戸之内」ともあることから、文禄三年以前の関戸郷に上和田村が含まれていないとは即断できず、さらに検討が必要と思われる。

(18) 関戸郷の範囲は不明な点も多い。『新編武蔵風土記稿』では古老の話として「古へ関戸千五十石と呼びて、百草・貝取・寺方・落川・和田の数村みな当村の内なりとも云り」と伝える。一方、皇国地誌「南多摩郡関戸村誌」には慶長五年に関戸郷を分割し、関戸村・中河原村・寺方村・乞田村の四村にしたとある。また、一五世紀の鶴岡八幡宮供僧の記録「当社記録(香蔵院弥祐記録)」(國學院大學図書館所蔵)には、関戸郷の村として中河原村と鹿子嶋村が見られ、『多摩市史 通史編一』では、鹿子嶋村を多摩川の流路変更で流された青柳嶋である可能性なども指摘し、中河原村・関戸村・寺方村・乞田村・和田村などに落川村・青柳村旧在地なども加えて候補としている。百草村の

百草八幡神社の阿弥陀如来座像は、背銘に「多西吉富真慈悲寺」と書かれており、百草も関戸郷に含まれる根拠になっている(注(7) 峰岸前掲書)。また、さらに一ノ宮村、連光寺村も関戸郷に含むとする説もある(原田信男「中世」近世における沖積地の開発と景観―船木田荘と多西郡三郷―)(原田信男編『地域開発と村落景観の歴史的发展―多摩川中流域を中心に―』思文閣出版、二〇一一年二〇一頁―二〇二頁 表5―2)。なお、「当社記録」では、「関戸六ヶ村」とある一方、「潮崎氏諸国檀那大帳」には「関戸七郷」とあるなど、時代によっても関戸郷の範囲は変化していると思われる。さらに、近世移行期には領主による分郷がおこなわれるようになり、文禄三年の検地の時点にも村切りがおこなわれている可能性がある。以上のことから本稿では文禄三年時点の関戸郷の検地帳の範囲のみに検討を留める。関戸郷については、今後、より多くの史料を確認・整理した上で、別に検討していきたい。

(19) 多摩市教育委員会所蔵

(20) 像内文書のうち、明治一二年のものの内容は以下の通りである。本尊の薬師如来が伝・行基作であることを伝え、伝秀和尚により修復がなされたと述べている。

抑当寺薬師如来八行基菩薩ノ御作也寛永式丑天伝秀和尚
御修覆入仏之為数年来ノ星霜故悉皆破壊ニヲヨビ今明治
十式年卯ノ十二月朔日東京芝山内前安養院ヨリ一老僧来

開帳ヲ願ヒ拝礼ノ上尊像并ニ殿堂ノ破壊ヲ歎キ自ラ仏工
極彩色并ニ担上不残老納四年已前ニ住職イタシ貧ナル処
ヨリ自費ニテ一老僧江頼入成満イタス同月十五日ニ数僧
来車シテ入仏了

明治十二年卯十二月十五日 観藏院現住三十二世村上
大禪九拜

芝山内 仏工

吉岡智禪代毫了

(21) 前掲注(3)。なお、観藏院は、以前は真言宗の観妙院
という寺院だったと伝えられている(「有山屋敷跡」『日本
歴史地名大系 東京都の地名』より)。

(22) 明治期の相澤家の退転については、宮森徳弥「相沢家
の盛衰―五流・伴主の末えいたち―」(多摩市史談会編
『郷土たま』三号 一九八四年)による。なお、相澤家の
菩提寺である寿徳寺、墓地のある観音寺の調査により、宮
森氏の論考では甥とされていた謙蔵を志勤の実子に変更し
た。

(23) 『多摩市史 資料編三 近代』第三章第三節、二八三頁

(24) 『多摩市史 資料編三 近代』第三章第三節、二九〇頁

(25) 多摩市教育委員会所蔵

(26) 清左衛門ほか乞田村や落合村の有山氏が寄進に応じた
ことは、明治七年(一八七五)の「校割簿(本尊堂什宝外
書上)」(多摩市教育委員会所蔵)などに清左衛門寄進の仏
具が記されていることで確認できる。

(27) 元禄六年(一六九三) 一二月「口上書(寿徳寺開基に
付)」(人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵佐伯家文書
No.二七六)

(28) 有山地区の地勢については、国土地理院ホームページ
「明治前期の低湿地データ」([http://portal.cyberjapan.
go.jp/](http://portal.cyberjapan.go.jp/))を参考にした。このデータでは有山地区を囲む南側
と西側の区域が旧河床とされているので、相対的に有山地
区は微高地になっていると考えられる。ただし、誤差があ
るという断りがあるデータのため、別の資料の検討も必要
だろう。

(29) 『多摩市史 通史編二』第一章第五編 六二四頁―六三
四頁

(30) 前掲注(3) 六三頁

(31) 府中市『府中市史』上巻、(一九六八年)、第四編第三
章 七三二頁

(32) 慶長元年大洪水では、一宮・関戸に隣接して、鎌倉街
道沿いにあった青柳村が中洲になった。さらに青柳村は万
治二年(一六五九)の洪水で流失したという。青柳村はそ
の後、四ッ谷村に移住したが、寛文十一年(一六七二)に
現・国立市青柳に移転したという(増淵和夫編『多摩川の
洪水と環境変動―近世多摩川洪水史と完新世段丘―』と
うきゅう環境浄化財団、二〇〇一年)。

(33) 人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵佐伯家文書
No.二二

(34) このほかの地名としては、「いなりさか」「きた」「くほ」「さか下」「しみす」「谷」「道下」「南」「ミねかくほ」「屋敷」「やしきまへ」「山はた」などが見える。

(35) 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵佐伯家文書No. 一八〇

(36) 伝秀和尚の没年は、文化六年「観藏院開山再代録(写)」(多摩市教育委員会所蔵)などによって分かる。また、由緒書の年代は、伝秀和尚の存世期に限定して考えたが、「新田村」のように、いつまで溯ることができるか不明な言葉もあるので、実際にはより後年に成立したか、書写の過程で言葉が変化したことなどの可能性も想定できる。

(37) 文政三年「米売渡前金証文之事」(多摩市教育委員会所蔵)

(38) 前掲注(3) 六七〇七〇頁

(39) 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵佐伯家文書No. 一七七―三

(40) 「正保三」承応元年札下村・札本村入会地出入一件」のうち「正保三年札下村目安」に、関戸村・市ノ宮村・青柳村とともに「野村彦大夫殿御代官所 山角藤兵衛殿御知行所 有山村 名主百姓」の記述がある(安澤秀一『近世村落形成の基礎構造』吉川弘文館、一九七二年 三五三頁)。(41) 「正保三」承応元年札下村・札本村入会地出入一件」のうち「承応元年内済証文」に、「有山村 九左衛門(印)

惣百姓(印)の記載がある(安澤前掲書 三六〇頁)。

(42) 万治二年「野銭・野札二付取極め手形」(安澤前掲書 三八三頁)。

(43) 多摩市教育委員会所蔵。なお、絵図の写真は、『多摩市史 通史編一』の第六編第一章第九節(九五三頁)に掲載されている。

(44) 安澤前掲書 第七章。万治二年から寛保二年の間の野札については、「札名書之覚」という帳面で知ることができ、同書三八六―三八七頁に野札の明細数と札下村の名前が抽出されている。

(45) 安澤前掲書 第八章四三一―四三二頁。寛保元年に連光寺村・一ノ宮村・関戸村・有山村より四ヶ村入会の秣場開発願いが出されるが、同年に取り交わされた「秣場一色相極取替証文」では有山村ではなく、「関戸村源左衛門」が野札を請けている。この源左衛門について、安澤は関戸村の組頭であり、有山氏であると述べ、有山村が請けていることと同義とするが、文禄三年検地帳の有山源右衛門を「源左衛門」とするなど、源左衛門と有山源右衛門との混同が見られる。一方、のちに関戸村の名主をつとめた相澤家は「源左衛門」と「源助」を代々名乗っており、「関戸村源左衛門」は相澤家である可能性もある。地域に多くの石仏を奉納した相澤了榮(叙保・一七八七没)もその名は源左衛門である。なお、有山村は『新編武蔵風土記稿』では関戸村の小村とされるが、『多摩市史』ではそれを誤り

とし、寺方村の小村とする。よって、「有山村」から「関戸村源左衛門」への野札の移行は、有山村から関戸村（あるいは源左衛門個人）へ権利が移行したと考える方がわかりやすいだろう。なお、関戸村源左衛門は、寺方村に山を持ち、有山地区の有山橋などを奉納している。一八世紀における源左衛門の財力や勢力範囲について、今後、更なる検討が必要である。

(46) 多摩市教育委員会蔵

(47) 安澤前掲書 三八六～三八七頁

(48) 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵富沢家文書一
二一六～二四

(49) 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵佐伯家文書一
五一

(50) 安澤前掲書 三六一頁

(51) 寿徳寺の現在地は、最初に寺院が建てられた場所と伝えられている。寿徳寺は過去に三回の火災に遭っている。一度目は元禄一六年（一七〇三）で宝永八年（一七一）に再建。二度目は天保元年（一八三〇）で天保一四年に再建。三度目は明治三十八年（一九〇五）で昭和三十五年（一九六〇）に再建された。明治期の寿徳寺は、現在地より南側に建てられていて、その場所に残っているが、昭和三十五年の再建の際に、創建時の場所に戻して建てたという。なお、明治三十八年から昭和三十五年の再建までの間、住職一家は山神社の北側にある観音堂を住居として、勤めをおこ

なつたという（前掲注（3）二二頁、ご住職への聞き取り調査より）。よって、「原ノ宿」と書かれた承応元年時、寿徳寺は現在地にあったと考えられるが、史料上の確認は取れないので、さらに精査が必要である。

(52) 原関戸村の呼称については、『多摩市史 通史編一』第六編第一章にて、詳しく検討が加えられている。それによれば、まず、寺方村と原村・原関戸村の違いについては、「公的な場合は別として、村の中や近隣の村の間では、一般に寺方村といった場合は、幕府領・浅井・曾我両知行所としての「寺方村」を意味し、これに対して山角知行所を「原村」もしくは「原関戸村」と呼んでいたのである」とし、知行主の違いによる線引きとしている。また、伝統ある関戸郷という意識が、「原村」や「並木村」などの他の山角知行地に「関戸」という言葉を付けて呼ぶことになった理由として推測している。『多摩市史』では、「原関戸村」のほか「原並木」「関戸並木」などについても同様の説明をおこなっているが、元禄二年裁許絵図に見られるように、各村々の分田が各所にあったことを考えると、こうした各村々の分田の混在により、二つの村名や地名を合わせた名称が生まれた可能性も想定できると思われる。

(53) 伊野弘世家文書『多摩市史資料編二 近世（社会経済）』四五二頁（No. 一〇五）

(54) 前掲注（3） 六四頁

(55) 多摩市教育委員会編『文化財資料3 多摩市の石仏』

一九七八年

(56) 安澤前掲書 三七三～三七六頁

(57) 一方、原関戸村と有山村が別個に扱われる事例もある。宝暦元年（一七五一）に観藏院が「有山村 観藏院」と名乗った史料では、宛所が「原関戸村 伊左衛門」となっており、有山村と原関戸村が別に扱われている。この後観藏院はしばらく原関戸村は名乗らず「寺方村 観藏院」と名乗っている。「原関戸村 観藏院」と名乗るのは、天保一〇年になってからである。今後、さらに村名の用い方の違いなどについて、見ていく必要があるだろう。

(58) 多摩市教育委員会蔵

(59) 多摩市教育委員会蔵

(60) 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵佐伯家文書 No. 二二七—四

(61) 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵佐伯家文書 No. 二二七—一「岩堰鹿絵図」の作成経緯は、同じ文書群に属する天保一三年（一八四二）九月の「上和田村・寺方村江相掛候岩堰山不法出入二付済口証文」ほか一連の史料が参考になる。

差上申済口証文之事

武州多摩郡上和田村小前村役人惣代名主庄右衛門同郡寺方村名主善九郎外式人江相掛不法出入申立

戸川播磨守様江奉出訴当六月廿五日御差日 御尊判頂戴相附

御吟味掛合之所、熟談内済仕候趣意左ニ奉申上候

右出入双方得与及懸合候処、訴訟方ニ而者村内字岩堰与申場所古来より村持之松山有之用水堰仕来り候処、当四月中相手之者破損之砌枝葉を代（伐）修覆仕来り候処、当四月中相手之者共先立小前大勢連参り理不尽ニ右山立木伐採候間差押へ候へとも、不聞入凡七、八尺廻り之松四、五本伐木いたし、相手村持堰場江運候旨其外品々申立、且相手方ニ而者訴訟方之者共品々相違之義奉訴候旨答上御吟味中之所、一体右相手方堰山ニ付先年訴訟方上和田村并寺方村より原村江相掛り伐木出入之節御裁許ニ相成、其節御裏書絵図面双方御下ケ之分如何之訳候哉訴訟方ニ相見相手方より右絵図面差出シ御吟味奉請候処、私領所々相分り堰山之儀者上和田村之者共村持与申証拠無之上者御裁許絵図面ニ取付候より外有之間敷乍併原関戸村之者共右山ニ而堰普請之外松立木伐取候段ハ無之旨相分り、尤元禄之度御裁許奉請候已前堰普請之時々立入寺方村同様伐木いたし、是迄用水堰相仕立田方植付候へとも、御裁許之通り堰普請之節寺方村原村ニ而、前書岩堰山芝間ニおゐて松木枝葉并土芝取之候へとも、原村与唱候場所者、当時之原関戸村ニ候へ者寺方村同様立入、其余原関戸村ニ而決而松木下草不刳取、且又上和田村之義者、古来之通り下草刳取其外今般御吟味之上、先年御裁許被 仰渡不相振様取極、聊無申分熟談内済仕、偏御威光与難有仕合存候、然ル上者右一件二付、重而双方より御願筋毛頭無御座候、為後証連印済口証文差上申

所如件

和田伝右衛門知行所

小前惣代

天保十三寅九月廿五日

名主訴訟人庄右衛門

浅井永之丞知行所

同

名主 要 蔵

山角礒之助知行所

同 八十郎

右兩人煩ニ付惣代

曾我駒之丞知行所

同

右寺方村

名主相手善九郎

上和田村内の字岩堰の地は古来から上和田村持ちの松山があり、用水堰破損の時にはその松山から枝や葉を伐って修復に使ってきた。しかし、今年の四月中に寺方村の者たちが、理不尽に松山の七、八尺廻りの松四、五本を伐って、寺方村持ちの堰場に運んでしまった。そのため、上和田村が寺方村を訴えている。

(62) 国土地理院ホームページ「地図・空中写真閲覧サービス」(<http://maps.gsi.go.jp/maplibSearch.do>)では、有山地区を含む写真として、昭和一九年十一月(整理番号8920)と昭和二〇年一月(整理番号95F15)に陸軍によつ

て撮影された空中写真が見られる。両者を見比べると、有山地区南側の大栗川の河川改修がこの間に進められたことがわかる。

(63) 国土地理院ホームページ「地図・空中写真閲覧サービス」(URL 前掲)より、昭和二年八月米軍撮影空中写真(整理番号USA コース番号 M388 写真番号90)

(64) なお、有山地区の周辺には多くの橋が見える。岩堰からの用水堀と大栗川を結ぶ水路に架けられた橋(有山橋)、五反田の側の橋(五反田橋)、八石田の入口に架けられた橋、集落の中央を通る水路が東向きに切り替わる地点で架けられた橋など少なくとも四つの橋が有山地区には見られ、その他に、宝泉院を下るぐみヶ坂から大栗川を渡る際に用いられた橋(ぐみヶ下橋)や、岩堰の近くにある橋も見られる。橋の位置と名称は「寺方村鹿絵図」(多摩市教育委員会所蔵)で確認することができ、岩堰からの用水堀にかかる「落川村分」の橋、用水堀の有山付近にかかる「五反田石橋」、有山地区の始めにあたる津久井道にかかる「有山石橋」、「くみヶ下石橋」、大栗川にかかる「くみヶ下板橋」、寺方村の水路にかかる「祢もも石橋」、和田村境の大栗川にかかる「宝蔵板橋」が記されている。

(65) 年未詳(江戸末期カ)「為取替申儀定一札之事」(多摩市教育委員会所蔵)に「字有山屋敷畝分江家越被成度二付」という言葉が見える。

(66) 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵佐伯家文書No.

二九三。なお、本史料の翻刻は、『多摩市史 資料編二 近世（社会経済）』四八〇頁「資料一 一四 元禄二年六月 寺方村・上ヶ和田村と原村との岩堰芝地争いにつき裁許 絵図」より引用した。

(67) 菊池注(1) 前掲書

(68) 「当社記録」の古富郷（関戸郷）や中河原村をめぐる話については、『多摩市史 通史編二』の第二章第三節3 六九七頁～七〇七頁、『多摩市史 資料編一』の八七二頁～九〇七頁、則竹雄一『古河公方と伊勢宗瑞』（吉川弘文館、二〇一二）などを参照のこと。

(69) 人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵富沢家文書No. 一六九～一七四、一一〇八～一一一六に寛永一〇年以降の中河原の新田や地名の記載がある。地名としては「字沢」「河原」「辰ノ新田」などが見られる。従来の中河原村の一部を連光寺村の土地として利用したのか、あるいは新たに開拓した土地を「中川原」と名付けたものなのかについては検討が必要である。

(70) 安澤前掲書 四六四頁

本稿の作成、および筆者が所属するパルテノン多摩歴史ミュージアム（公益財団法人多摩市文化振興財団）の展示調査にあたっては、地域の方々や多摩市教育委員会・人間文化研究機構国文学研究資料館に多大なるご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。また、本稿作成の

きっかけを作ってくださった安田次郎先生・古瀬奈津子先生・新井由紀夫先生をはじめとする諸先生方、貴重なご助言をくださった多摩地域史研究会の方々に心より御礼申し上げます。

（公益財団法人多摩市文化振興財団学芸員）